
Over Line～君と出会うために

さつきひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Over Line（君と出会うために

【Nコード】

N9438Y

【作者名】

さつきひろ

【あらすじ】

ある日の昼休み、彩と同じテーブルに乱入してきた一人の男。

彼は終始マイペースで勝手な振る舞いをし、彩は腹立ちを抑えきれない。なのに、そのペースに巻き込まれていく。

入り口の方から人が入ってくるたびに、ドアに取り付けられた鈴が重苦しい音を立てる。この店と同様に年季の入ったそれは、お世辞にも軽やかな音とは言えない。それでも、人が来たことを知らせる役には立っているのだから、無用の長物というわけでもないのだろう。

鈴くらい、さっさと取り替えたらいいのに、と思わなくもないが、慣れてしまうと、これはこれで味がある気がしてくるから不思議だ。きっと、ここに通う常連は、似たようなことを考えているに違いない。誰かが文句を言っているところは見たことがないし、そもそも、鈴を替えたところで、ここの客層や入りが変わるとも思えない。

つまり、何も変わらないから放置されているのだろう。

ここは、まるで時が止まったかのようにレトロな空間だ。

いつ来ても時が止まっているように思える、寡黙なマスターが一人でやっている、街の小さな喫茶店。駅からはさほど遠くはないが、大通りからは一本入った閑静な場所にあり、通りすがりにふらっと立ち寄ることができるような魅力的な立地ではない。

年季の入った扉を開ければ、カウンターと、十席にも満たないテーブル席。昔ながらの、とでも付け加えたくなるような外装とその立地も手伝って、客の数は限られている。それでも、それなりに常連客はいる。

彩^{あや}だって、それが気に入って通っている一人だった。

限られた人数しか入らない店は静かで落ち着くし、マスターの淹れるコーヒーの香りが漂う店内はひどく居心地がいい。考えごとがある時や一人になりたい時にはもってこいだし、コーヒーを飲みながらぼんやりとしているのも至福の時だった。

彩は、この近くにある小さな会社の事務員だ。小さい事務所の性とでも言うべきか、交代でお昼を取るために一人で昼休みを過ごす

ことも多い彩は、あまり混み合わないこの店が気に入っていた。昼時でもさほど混雑することもないここは、読書や考えごとの邪魔をされることも少ない。店の経営としてそれはどうなのかと思わなくもないが、彩にとっては理想的な環境だ。

毎日のように通っていけば、おのずと座る席も決まってくる。今日も今日とて昼食を兼ねて店に赴けば、カウンターのいつもの席は、残念ながら先客によって占領されていた。仕方なく、一番奥にあるテーブル席を選ぶ。席数の少ないこの店で、一人客である自分がテーブル席に座ってしまったては、迷惑になりかねないが仕方がない。いつもだったら、カウンターを利用していた。

後から考えれば、この席に座ったこと自体が、全ての発端だった。けれど、その時、その席に座らなければ、何事も起きなかったのだと思えば、まさしくそれが発端だったと言えるのだろう。

「おなかすいたな……」

はあ、と、溜め息をひとつ。

いつもならもう少し早い時間にお昼に入れるのに、今日はいろいろと立て込んでいて誰もお昼を食べに行く余裕がなかった。ようやく時間が取れた頃には昼休みというにはだいぶ遅くなってしまっていた。

だから、ここでゆっくりしていく時間もあまりない。それでも、食後のコーヒーを飲んでいる時間くらいはあるはず。

それは、いつもの日課で、変わらない毎日だった。

職場と自宅とを往復するだけの、変わり映えのしない日常。それはつまらないかもしれないけれど、平凡で堅実な生き方だった。波乱万丈な人生を送りたいとは思わなかったし、ドラマに出てくるような恋も、映画のようなスリリングなできごと、今の生活には無縁のことではなかった。

彩はコーヒーを一口飲んで、持って来た読みかけの文庫本を出そうとして頬を引きつらせた。

お気に入りの革製の洪めのブックカバーを掛けていたそれが、何

やら珍妙なイラストのついた紙製のものに変えられている。

「な、何これ……」

全く、身に覚えがない。

いや、こんなくだらない悪戯をする相手の心当たりはある。だが、あまり考えたくない。

（大輔……あのバカ!!）

思い浮かべた幼馴染の顔に向かって、彩は思い切り罵倒を浴びせた。

大輔は彩の実家の隣に住んでいた幼馴染で、今はCG関係の仕事に就いている……らしい。らしい、というのは、あまり興味を持って彼の仕事の話を聞いたことがないからだ。彼の仕事の話を聞こうとすると、どうしてもその延長線上にある趣味の話にすっ飛んで行って收拾がつかなくなるので、面倒だからだった。

お互いに実家から出て来て数年、たまに会って近況報告をしあうくらいの付き合いは続いている。とは言え、大輔とは色めいた方向に発展することはまるでない。何故なら、彼は相当のアニメオタクであり、あまりそういったことに興味はないらしいからだ。

昨日だって久しぶりに食事に誘われたものの、終始そんな話ばかりされていたような気がしないでもない。

別に、彼の趣味を馬鹿にしたいとは思わないし、それはそれで勝手にやってくれたらいいとは思うのだが、たまにこういう悪戯をするから頭痛がするのだ。

たぶん、これは、今、彼が関わっているという何とかというアニメのキャラクターだろう。何だかいろいろと細かく説明をされたのだが、右から左に聞き流して終わってしまった。きっと、彩が聞いていなかったのに気づいてこんなことをしたに違いない。

こういうどうでもいい悪戯を、本気でやるのが大輔なのだ。

再び溜め息をつけてそのブックカバーを外そうとすると、挟んであった葉まで同じキャラクターの仕様に変えられている。どこまでも用意周到だ。頭痛がしてくる。

すると、何とも言えないタイミングで携帯がメールの着信を知らせる。相手を確認すると、案の定と言うべきか、この悪戯の張本人だった。

彩が驚いたのを想像しているのが楽しいのだろう。メールの文面は短かったが、やけに楽しそうだ。腹が立つということでもない他愛無い悪戯ではあるが、さすがにこれを会社の人たちに見られてしまうようなことがあるのは気恥ずかしい。彼の仕事をバカにしたくはないけれど、そういう目で見てしまう人たちがいるのも本当だから、面倒ごとにはなるべく避けたかった。

彩はそのブックカバーを外して、丁寧に折り畳んでバッグにしまい込む。それから改めて文庫本を開き、読みかけのページに視線を落とした。

そうして、彩が本の世界に引き込まれようとしていた、その時。

店の扉が、勢いよく開いた。

店そのものの佇まい同様に年季の入った扉は、もちろん、自動で開くようなものではない。時折、雨が降った日などは湿気で立て付けが悪くなり、客を拒否しているのではないかと思うくらいに重くなる代物だ。そして、扉同様に年季の入った鈴が、鳴っていると言うよりも勢いに振り回されて耳障りな音を立てた。

その騒々しさにせっかくの時間を台無しにされたようで、彩は眉をひそめて視線を上げた。どうやら、入ってきたのは若い男らしい。ちらりと窺うが、見知った顔ではない。

どうでもいいか、とばかりに、彩は視線を本へと戻した。その瞬間に、騒がしい珍客への興味は失せた。知らない相手がどうだろうと、彩には関係のないことだ。

うるさい客がこの静かな空間の空気を乱して行くのは不愉快だが、ここは彩の店ではない。彩には客を拒む権利はないし、ほんの一時だけ我慢して、関わらなければいいだけの話だ。

と、彩が我関せずを決め込んでいると。

どかどか、と足音も高らかに歩いてくる音がして、誰かが彩の向

かいの空いた席に腰を下ろした。

「……はあ!？」

相席を頼まれた覚えはない。もし、そうだったとしたら、休憩の残り時間もあまりないことだし、彩は席を立てて会計を済ませてここを出てもかまわない。こちらは既に食事を済ませてしまっているのだから、何も問題はない。

「何なの、あなた」

思わずそう言ってその相手を見やれば、相手は慌てた様子で周囲をきよろきよろと見回す。

「ごめん、ちよつとの間だけ、ここにいさせて!」

ね? と、両手で拝むように懇願の姿勢を取られて、彩は思わず黙り込んだ。

向かいに座ったのは、若い男だった。おそらく、彩と同じ年か、それよりも少し上くらいだろう。先ほどの騒がしい珍客は、この男に違いない。

派手過ぎない程度に明るく染めた色の髪を長く伸ばして、後ろ髪を緩く後ろで三つ編みにしいて、何とも目を惹くタイプだ。どこが、ということを引きちんと説明はできないが、それをオーラというのならそう呼ぶのかもしれない。言い換えるのならば、存在感がある、とても言うべきだろう。彩はぼかんとして、目の前に座る男を見つめた。

たぶん、この男は、彩が最も苦手で嫌いなタイプの人間だ。どう鼻屑目に見ても、相容れないタイプであることを本能的に感じて、警戒心だけが頭をもたげる。

本音を言えば、これ以上は関わりたくはない。だが、彼はどれくらいくれるつもりはまるでないらしい。

彩の目の前にどっかりと腰を下ろして何をするのかと思えば、彼はポケットの中からくしゃくしゃにまるめてあった帽子を取り出して素早くかぶった。そして、そのままテーブルの上で組んだ腕に突っ伏すような形で顔を伏せ、啞然としている彩に向かってにこりと

笑って、小さく人差し指を立てて「静かにね」と言って笑った。

「俺、ちょっとだけ寝るから。だからさ、少しの間でいいから、何も言わないでいてくれる？」

何かを言うも何も、彩には何がかさっぱりわからない。どう考えても口の挟みようがないではないか、と思っている彩をよそに、彼は本当に顔を伏せて寝の体勢に入ってしまった。

いきなり人のテーブルに相席を決め込んで、そのうえ、寝るとは何事だ。

腹は立つが、何も言わないでと言われてしまった手前、彩は馬鹿正直に口をつぐむしかない。

相手は見も知らぬ他人なのだから、そんなお願いなど聞いてやる義理も道理もないのだが、妙に律儀な彩の性格では無視することができないのだ。

彩がむつつりと黙りこくったまま成り行きを見守っていると、またしても年季の入った扉が開かれた。驚いてそちらに目をやれば、半開きの扉から中を覗き込んでいたのは、数人の少女たちだった。

彼女たちは息を弾ませ、きらきらとした視線で店内をぐるりと見回した。

「……いないみたい」

「でも、絶対、見たよ！ この通りを歩いていたのは、絶対、なんだから！ あたしが見間違えるわけないもん。この辺りのどこかの店に入ったのは確実！」

「……この店じゃないんじゃない？ 何て言うか、らしくないし」

「うーん、そうかも……。タカくんが選ぶにしては、地味過ぎって言うか、古過ぎって言うか？」

ここを気に入って通う常連や店主もいる前で、神をも恐れぬ暴言を吐く少女たちは、ひとしきり店内を見回してから顔を見合わせた。「ねえ、やっぱり、この通りを抜けた先にあるショップじゃない？ 前にさ、どっかの雑誌であそこの服が好きだとか言ってたような気がするし！」

「きっとそうだね！」

彼女たちは騒ぐだけ騒いで、それを謝罪することもなく、慌ただしく店を出て行った。

後に取り残されたのは、その展開について行けずにぽかんとしている客ばかり。彩もその中の一人であることに間違いはなく、騒がしくも厚かましい少女たちに何とも言い難い溜め息をついた。

そのまま日常に戻るには、些か難のある微妙なごちなさを含む空気が漂う。

「……助かったあ」

そんな微妙な空気を完全に無視して、目の前の男が突っ伏していた顔を上げた。向かいにいる彩にも、周囲の状況にも、全く動じていないと言うか、まるっきり意識の外、とでも言うべきか。

「ねえ、あの」

彼が何から助かったのかなんて、追及するつもりはない。むしろ、どうでもいい。彩は、一人の時間を邪魔されてすこぶる機嫌が悪かった。

刺々しく声をかけると、彼はきょとんとして彩を見た。

何故、彩が怒っているのか、彼は欠片も理解していなさそうに見える。

「はい？」

「はい、じゃないでしょう！ 用事がないのなら、他の席に行って欲しいんだけど。見たところ、相席しなければならいほど混雑しているわけではないんだけど？」

ここは、さほど席数があるわけでもない。だが、昼時を既に過ぎてしまった時間の今、別にわざわざ相席するほど混み合っていない。

用事がないのなら、とっとと他の場所へ移って欲しい。

「何だか、つれないお言葉ですねえ」

「言わせてもらうけど、私にとってあなたは見ず知らずの赤の他人です。そんな人に一人の時間を邪魔される覚えはないし、不愉快で

す。そう言えばわかりますか？」

「……見ず知らず。って、俺のこと、知らないの!？」

「どうして、私があなたのことを知っていなくてはならないの？」

あなたはこの店の常連でもないし、同じ会社の人でもないし、私の個人的知り合いなんかであるはずもない。悪いけど、あなたのように頭に豆腐が詰まったような友人はいないから」

「……豆腐？」

彼はきょとんとして彩を見て、それから、わずかに傷ついたような表情を浮かべた。

一瞬、言い過ぎてしまったかと反省するが、腹立たしい気持ちの方が勝ってしまい、素直に謝罪の言葉は出て来ない。

「ふうん……そっかあ。ねえ、ひとつ、聞いてもいい？」

さすがに怒るかと思ったが、彼は見当違いのことを言い出した。

「え？」

「あのさ、確認するけど、本当に俺のこと知らないの？」

疑うように彩を見やり、言葉を重ねる彼に、彩は更なる苛立たしさを覚えた。

ほんの一瞬前、謝った方がいいかな、なんて思ったことも、吹っ飛んでしまった。

疑われても困る。本当に、知らないのだ。もし、この相手に自分のことを一方的に知られているのだとしたら、気分が悪い。そもそも、そんなこと、念を押されるようなことでもない。

「知らないわよ。用事がないのなら、他へ行ってくれる？ 私は、本を読みたいの。それを、あなたが邪魔しているのよ」

もう、時間がない。気になる先まで読み進めるつもりだったのに、一行も進めなかったことを思うと更に腹が立ってきた。

「……あのね、俺ね、東城貴樹とうじょうたかきっていうんだけど」

聞いてもないのにいきなり自己紹介を始めた目の前の男に、彩は怒りを通り越して頭を抱えなくなった。

きつと、この男は馬鹿だ。アホだ。関わらない方がいい相手に、

関わってしまった気がする。

「何度も言うけど、私はあなたのことなんか知らないから」

彩が溜め息混じりにそう返すと、彼はにこにこ笑った。それも、やたらと嬉しそうに。

「うん、だから、自己紹介！ 何か、新鮮で嬉しくて！」

「は？」

「ねえ、俺と友だちになってよ！」

「……はあ？」

貴樹、と名乗った彼の唐突な申し出に、彩は面食らって聞き返した。

何だか、嫌な予感が、する。

「いや、ほら、こうやって出会ったのも、何かの縁ってことで！」

あ、ねえ、携帯貸して！」

いいとも悪いとも言っていないうちに、テーブルの上に放り出してあった携帯を取り上げられ、勝手にいじくられ、メールアドレスの交換、とやらをさせられた。図々しいにも程がある。帰ったら速攻削除だ。

「はい、俺のアドレスも登録したから！ 彩っていい名前だね！」

上機嫌で携帯を返されるが、対する彩の機嫌は降下一直線だ。人が反応できないでいるうちに勝手に個人情報を見られたこの状況でにこにこしていられる人間がいたら、ぜひともお目にかかってみたいものだ。

「ねえ、あなた、どういうつもりなの」

「どういうって……だから、お友だちに」

そう言った貴樹の眼差しが、テーブルの上に放り出してあった棗の方に吸い寄せられる。

「スイートキューティ！」

「は？」

「ねえ、スイートキューティ好きなの！？ 俺も大好き！ いっぱいレア物持つてるよ！」

ごそごそとポケットを探ると、貴樹は似たようなゴミ（彩にとつてはまさにゴミだ）を、ざらりとテーブルの上に広げた。それは、いわゆるフィギュアと呼ばれる類のものだろう。小さめのデフォルメされたタイプのもので、あれこれ種類があるらしいことを大輔が誇らしげに言っていたことを思い出す。

そうしてから初めて、貴樹が口にしたスイート云々が、まさに大輔が言っていたキャラクターの出てくるアニメのタイトルであったことを思い出した。

「お近づきの記念に、これ、あげる！」
要らない、と言いつ返し気力も失せた。

最初に、豆腐が詰まっている、なんてひどいことを言ってしまったような気がしたが、それは、豆腐に対して失礼な気がしてきた。それ以上に、何と言うか、本気で関わらない方がいいように、思える。

おそらく、黙っていれば女性からはもてはやされる顔立ちなのだろう。こういう派手なタイプは彩が苦手とする相手だから、私生活で接点があることはまずありえない。本能的に拒否してしまうからだ。

頼むからあまり喋らないで欲しい。大輔の話を聞いているよりもひどい頭痛がしてくる、と、思ったものの、それを口に出せば猛然と反撃して来そうだから、やめておいた。

このまま無視してしまうかどうかするか、悩んだところで勝手に登録されてしまった事実は消せない。さすがに目の前で消すということをするのは気が咎めるから、持って帰って、知らない所で存在を消去するしかあるまい。

「じゃあ、後でメールするね！」

と、自分勝手な言葉を言い残して、彼は実にさりげなくスマートに彩の分の伝票を持って行き、それを支払って出て行った。

そのあまりの自然な行動に口を挟むこともできずに見送ってから、彩は我に返る。

ひよつとして、それほど嫌な奴でもないのだろうか。いやいや、あれは警戒するべき人種だ、とぐるぐる考えながら、彩は最後のコーヒーを飲み干したのだった。

そいつからメールが来たのは、その夜のことだった。

彩はシャワーを浴びて出てきたところで、メールの着信を告げるように点滅する携帯に気づき、携帯を開いた。たまに来るメルマガかと思いきや、メールの送信者の欄には、昼間の豆腐野郎の名前がある。

あの男は、ちゃっかりと自分の名前も登録しておいたらしい。

そのまま削除してしまおうかとも思ったが、さすがにそれは悪いような気がしてやめた。いくら何でも、読みもしないで削除はひどい……かも、しれない。存在ごと消去しようと思ったのは事実だが、成り行きで奢ってもらってしまったのも事実で、何となく気が咎めてそのままだった。

とは言え、昼間のあの様子からすると、いきなり馴れ馴れしい文面がある可能性もある。彩には理解できない顔文字だとかが乱舞していそうな、そんなイメージだ。

だが、恐る恐る開いたメールには、昼間の印象とはまるで違った丁寧な文章が並んでいた。

それは、昼間の自分の行動の非礼を謝罪する文章から始まっていた。そして、そのお詫びとお礼とを兼ねて食事をご馳走したいので都合のいい日程をいくつか教えて欲しい。その中でこちらが合わせられる日程をお知らせします、と結ばれていた。

昼間の印象からはまるで別人のような、丁寧で落ち着いた言葉で書かれたそのメールに、彩は考え込んでしまった。

あの外見や行動と、このメールの礼儀正しさが、どうやっても結びつかない。

あれで、意外と生真面目だったりするのだろうか、とは考えたものの、彩は返信メールを書くことはなかった。何を書いていいのかもわからなかったし、いきなり食事に誘われても、どう反応してい

いか困ったからだ。それに、スイート何とかの話を食事中に延々とされても嫌だ。そんな話題で盛り上がるのは、大輔だけで充分である。彩には、それ以上その話題を受け入れるキャパシティはないのだ。

放っておこう、と決めて、彩はそのまますっかり忘れてしまっていた。

彼から二通目のメールが来たのは、それから、十日ほど後のことだった。

そのころには彩は彼のことなどすっかり忘れていて、誰だこいつ、の一言で切り捨ててあっさり削除するところだった。

寸前で気づいてメールを開くと、前回と同じようにあの時の様子からは想像もつかないような几帳面な文面が、そこに綴られていた。その内容は、返事がないことから、彩が怒っているのではないかと心配しているものだった。おろおろしているのが画面越しに伝わってくるようなそれに、彩は思わず笑いそうになる。

最後に、同じように食事を誘う言葉があり、このメールに返事がなかった時には、今度こそアドレスも名前も全て削除するので心配しないで下さい、と付け加えられていた。どうやら、本気で彩が怒っているのだと解釈しているらしい。

「……気にしているらしいのは、意外かな」

そんなことを気にするようなタイプには、見えなかった。何しろ、初対面がアレで、第一印象としては最悪の部類に入る。見た目の派手さも手伝って変な先入観を持っていたが、もしかすると、思っていたよりもずっと真面目に物事を捉えている人間なのかもしれない。だとすれば、豆腐などと称してしまっただけが悪かったかもしれない、と、彩は少しばかり反省した。

とは言え、そもそも、そんな印象を与えるような真似をしたのは向こうなのだから、それはそれで仕方のないことだ。

だが、第一印象をいつまでも引きずっていても、こんな生真面目にメールをしてくる相手には失礼だ、と考え直す。失礼な相手に払

う礼儀はないが、礼儀正しく接してくる相手には相応の返事を返すのが礼儀だ。

そうになると、最初のメールを無視してしまう形になってしまったのが、少しばかり気が咎める。

彩は少し考えてから、東城貴樹宛てに簡単にメールを書いて送信した。

返事が遅れたことへの謝罪と、食事を誘ってくれたことへのお礼。都合がつく日をいくつか選び出して書き添えただけの、事務的なメールだ。さすがに、最初に来たメールの存在すら忘れていましたと正直に書くことはできず、返信が遅れたのは私生活が忙しかったせいだ、ということにしておいた。その方が角も立たない。

意外と、あれでもただの馬鹿ではないのかもしれない。

送信を終えた携帯を閉じると、彩は明日に備えてさっさとベッドに入ったのだった。

その、頃。

都内某所にある放送局の控え室で、貴樹は携帯を睨んで考え込んでいた。

ついさっき、ずっと待っていたメールが来たものの、開いて読む勇気がないのだ。

「……何やってるの、貴樹」

「いや、別に……」

「さっきから携帯睨みつけているけど、睨んでいるばかりじゃメールは来ないわよ。それに、もうすぐ本番なんだから、気持ちちはちゃんと切り替えてね」

「……はあい」

本番を前にして嫌なメールを見て凹んでしまうのはどうかと思っ

だが、二時間もある生放送の間、メールの内容が気になってそわそわしているというのは、もっとずっと性質が悪い。気合を入れてメールを開いて見ると、それはたいして長いものではなく、内容も、貴樹が恐れていたほど辛辣なものではなかった。

貴樹はあからさまに安堵の溜め息をつき、早く用意をしろと急にきたマネージャーが不思議そうな顔をするのを、笑って誤魔化した。

「よっし、東城貴樹、いざ出陣！」

「……あんまり最初から飛ばさないでよ。二時間もあるんだからね。途中で燃料切れとかしたら、シャレにならないでしょ」

「わかってますよー」

これから臨むのは、毎週レギュラーで受け持っている、深夜のラジオだ。これから、二時間の生放送。最初から飛ばして行ったら、途中でテンションが落ちてしまうのは目に見えている。これまでの経験でそういう痛い目を見ているから、マネージャーが警戒するのも理解できなくはない。

普段なら、そんなマネージャーのお小言に少しばかり苛立ちを覚えるところだが、今日は気分がいい。これなら、最初から最後まで高いテンションを保っていられそうな気がする。

貴樹は所定の位置に座ると、いつも以上に調子よく喋りだした。

「皆さん、こんばんはー！ REAL MODEの東城貴樹です！今夜も都内某所のスタジオから、完全生放送でお送りします。これから二時間、俺のお喋りにお付き合ってください。まずは一曲目、REAL MODEで、？テクニカル・ジョーカー？をお聴き下さい」

今現在、世間では大人気のはずのプロデュース・ユニット、REAL MODE。そのメイン・ヴォーカルであり、プロデューサーである天宮順平あまみやじゅんぺいを核とした製作集団が世に送り出す楽曲を歌うための、唯一のメンバー。それが、東城貴樹だ。

時間に追われるばかりの殺人的スケジュールを笑顔でこなし、ど

んなに突っ込んだインタビューも得意な軽妙なトークではぐらかす、最近のヒットチャートの常連。成人男性としてはやや小柄な部類に入るが、整ったルックスと生まれ持った天性の声の魅力は人々を惹きつける。バラードで甘く囁くような甘い歌声を披露したかと思えば、次のロックナンバーでは叩きつけるような力強いシャウトを聴かせる、魅力溢れるヴォーカリスト。

しかし。

彼の実態は、たとえば、あまり大きな声で吹聴できるような代物ではなかった。彼を楽曲やインタビューでしか知らないファンが聞いたとしたら、滂沱の涙を流してイメージを狂わされたと嘆くに違いない。

彼は、ただのオタクだった。アニメやゲームの美少女をこよなく愛し、二次元の美少女を『俺の嫁』と宣言し、たまのオフには溜め込んだアニメの録画を見るか、アキバに行つてエロゲやフィギュアを買いあさるような人種である。どこからどう見ても、真性のオタクにしか見えない趣味だ。

今の絶賛のお気に入りには、スイートキューティというアニメだ。いわゆる魔法少女ものの範疇だが、深夜帯に放送していたアニメだから、厳密には子供向けではない。魔法少女という響きで侮つて見ていると、痛い目を見る深い話だ、と、貴樹は思っている。その中でも、貴樹はヒロインの親友ポジションにいる『あすか』がお気に入りで、今現在の『俺の嫁』だ。

もちろん、そんなことを表立って喋つては、せっかく作り上げたイメージが崩れる。マニアの常とでも言うべきか、元来はお喋りな貴樹ではあったが、言いたいことの半分も言えないのでは身体に悪い。にっこり笑って用意された台本を読むことを了承してはいても、もやもやとしたものは確実に増えて行く。

ああ、これがストレスってヤツなのかな、と、思ってしまうのは仕方があるまい。

（大体さあ、俺を流行に乗せようってのが無茶な要求なんだっての。

自慢じゃないが、俺の家のテレビはゲーム画面とアニメしか映さんのだぞ。イメージが崩れるから喋るなって言われても、俺がオタクなのは変えようのない事実だったのを認めろよな……。アニメとエロゲが好きで悪いのか。人に迷惑かけてるのか？　そもそも、そんなのがばれて離れて行くようなファンなんて、俺のことなんかそんなに好きじゃないのさ）

流れる自分の曲を聴きながらいい感じとそんなことを考えている自分の後ろ向きな思考も、実は嫌だ。だから、マネージャーのことにも一理あると思って、おとなしく従っている。完全に彼女の言葉を否定できないからこそ、納得できない部分があっても従うべきだと判断しているのだ。

歌うことは、好きだ。

歌は自分の天職だと、思っていることも本当だ。

だから、ここで失敗して終わりたくない。自分の趣味を知られることは痛くも痒くもないが、それが原因となって歌えなくなるという未来があると考えるのは、ぞっとする。

それだけは、絶対に嫌だった。

とは言え、発言を制限される生活はかなりのストレスをもたらすことに、違いはなかった。趣味のことになると思えば何倍も饒舌になっってしまう貴樹としては、かなり辛い。ふとした拍子に、うっかり爆発してしまいそうになることもある。

正直になれる場所が欲しい、と思うことがある。自分をただの『東城貴樹』とだけ見て、話をしてくれる、そんな友だちが欲しかった。素の自分に返ることができるのが、隠れアカウントでつぶやくツイッターだけだというのは悲しすぎる。

そりゃ、地元に戻ればそういう友だちはいる。こんなに有名になる前にできた友だちだって、少ないながらも存在する。それでも、彼らは『REAL MODEの東城貴樹』を知っているわけで、当たり前なことでも少し寂しい。

（あれだけテレビに出ているのに、俺のことを知らない人もいるん

だな……)

貴樹自身、自分はそれなりにトップに近い場所にいると思っていた。

それは自惚れでも何でもなく、事実として存在しているものだったからだ。テレビに出ていない日なんて数えたこともないし、そうではない自分なんて、今は考えられなかった。

なのに、彼女は自分を知らないと言った。あの言葉に、嘘があったとは思えない。おまけに、頭に豆腐が詰まっているとまで言っているのだ。

腹が立つよりも何よりも、純粹に疑問に思った。

あれほどまでにテレビに出ているのに、自分を知らない人間がいることへの、純粹な疑問だ。けれど、それはすぐに興味に変わり、その気持ちは、今や何とも表現し難いものになりつつある。

最初は、彼女が自分を知らないということに、本当に驚いたのだ。

迂闊に一人で出歩くと、即座にどんなでもないことになるのは経験済みだ。さすがにそんな場所にいるとは思われないのか、アキバでうろついている時に見つけられたことはないが、普通に歩いていて見つかることはよくある。一応、変装らしきものをすることはするのだが、ファンにかかればそんなものはあってもなくても同じことらしい。この前、彩と初めて会った時にしても、一人でぶらぶらしていたらファンに見つかって追い回されて、どうにか逃げるために飛び込んだのがあの喫茶店だった。

イメージされている東城貴樹であれば、絶対に立ち寄りそうな場所。咄嗟に考えたにしては、成功だったと思う。当然、あの後、きちんとお店に連絡をして、迷惑をかけたことを告げ、謝罪はした。迷惑をかけたのは事実だから、謝るべきところは間違えてはならないからだ。

彼女は……彩は、おそらく、あの店の常連なのだろう。あそこで過ごす時間を邪魔されて怒っていたようだから、そうに違いないと思う。

あまりテレビを見ない人なのかもしれない、とも考えたが、それにしても、まるで認識されていなかったのが嬉しいのか悔しいのかよくわからない。

貴樹が出演しているのは、何も音楽番組に限ったことではない。バラエティだとか、トーク番組だとか、もらえる仕事にはできる限り応えたいとは思っている。何より、CMだってそこそこ出ているはずなのに、それすら認識されていないというのも何とも言えない。彩は、よほどテレビを見ない種類の人間なのだろう。

だが、考えてみれば、そういった相手は貴樹にとって貴重な存在だった。いろいろと聞かれずに済むし、イメージと違うことを口走ったとしてもがっかりされたりはしない。うっかり『俺の嫁』の話をして、苦笑されるだけでドン引きされることはないかもしれない。

世間に与えているイメージには気を使い、と口をすっぱくして言われているのだ。鬼のようなマネージャーからは。

この放送が終わったら、ちゃんとメールに返事を書こう。と、貴樹はいつになくうきうきしながら思った。

彼女は、食事は何が好みだろう。

生放送中だというのに、貴樹の頭の中はお花畑だった。

まずは、友だちになることから始めよう。そして、彼女が自分の趣味に寛容であれと思う。スイートキューティのグッズを持っているくらいだから、吐き気がするほどオタクを嫌悪しているとか、そういうことはないと思いたい。

その先にどうなるかはわからないまでも、貴樹は、そう決意したのだった。

(……メール？　こんな朝っぱらから、誰？)

彩が朝起きてから携帯を覗くと、メールが来ていた。

送信時刻を何気なく見てみれば、午前四時半。普通の生活をしているのなら、夢の中だ。どういう生活サイクルの持ち主が、こんな少々常識はずれな時間帯にメールを送ってくるのだ、と思えば、差出人の欄は東城貴樹になっていた。

彩でなくとも、首を傾げたくなるのは常識の範疇で生活している者としては、当然のものだと思いたい。昨夜は多少なりとも感じていた罪悪感が、微妙に吹っ飛んでしまいそうだ。

少しすっきりしない頭でメールを開いて見てみると、最初に来たメールとほぼ同じ内容だった。要するに、食事に誘っているものだ。彩が都合のつく日程を書いたものだから、早速日時と場所を指定する旨が記されていた。

「……どうしろと」

指定されている日時は、明日の夜。予約はして話は通しておきますのでご心配なく、なんて、紳士めいた言葉まで添えられている。ここまででされているのに、今更無視すると言うのも気が引ける。

彩が思っている以上に、向こうがこの前のことを気にしているらしいことが伝わってくるからだ。

だが、問題は、向こうが指定してきた場所だ。

意外すぎて戸惑う、とでも言えばいいのかもしれない。急にこんな場所に呼び出されても、困る。第一、彩はこんな場所には縁がない。

指定されたのは、いわゆる一流ホテルのレストラン、だ。

名前は聞いたことがあるが、ここには行ったことはない。行こうと思ったこともない。職場の研修で一応のマナーは叩き込まれているから、こうした場所に呼ばれて不自由を感じることはないが、問題はそこではない。

こんな場所に呼び出して何がしたいのか、彩にはさっぱり理解できない。第一、このレストランの値段は卒倒しそうなものがついていたような気がするのだが、どうしろと。

「……これは、もちろんあいつの奢りなんだよね……?」
でなければその場で帰る、とつぶやきながらも、彩は簡単にメールを打って送信した。

返事は、たった一言だけ。「わかりました」だった。

「……どうしろって言うんだろう……」

指定されたレストランの入り口を、物陰からちらちらと伺いつつ、彩は一人つぶやいた。

何と言うか、気後れして入れない、とても言おうか。

正直に言って、このような場所には不慣れだ。普段の自分には、縁遠い場所。一応、事前に調べてみたが、ドレスコードなどは間違いはないはずだ。さすがにジーンズで来るような常識はずれな振る舞いはしていないから、大丈夫だろう。それでも、敷居が高いことに変わりはない。

ここに来るまでに何度となく帰りたいと思ったが、一度約束してしまったからには破るのは人として何か間違えている気がする。

柱の陰に隠れて深呼吸を繰り返し、気合を入れ直して入り口に近づいて行く。

「いらっしやいませ。ご予約はなさっておりますか？」

「……あ、えーと、待ち合わせなんですが……。三枝彩さえぐさあやといいます」

貴樹からのメールにあった通りに名乗れば、彼は既に心得ていたようで、即座にうなずいた。

「東城さまのお連れさまでですね。承っております。東城さまは既にお待ちですので、ご案内いたします」

素知らぬふりを装って案内を受けながらも、彩は内心で少々うろたえていた。

頭の中は、あの、貴樹と名乗った男の正体について何通りもの仮説がぐるぐると回っている。だが、明確な答えのビジョンは見えてこない。謎過ぎるのだ。

最初に受けた、頭のねじの緩んだ男の印象。そこはかとなく、派手に見える外見。そして、メールから受けた意外と生真面目そうな印象。そのうえ、選んだのがここだ、という事実。

さっぱりわからない。

わかるのは、貴樹が最初の印象とは違う男だ、という客観的事実くらいだ。

いろいろと考えていると、ますます彼が何者なのかがわからなくなる。だが、それについて、誰かが答えをくれるわけでもない。かと言って、本人に直接尋ねるというのも、どうにも気が引ける。

彩が悩んでいるうちに案内の者が立ち止まり、指し示された先は奥まった場所にある個室だった。

（個室、なの！？　　どういうこと？　　あの人、何者？）

ますます、ワケがわからない。

第一、こんな所、あんな程度のことで初対面に近い相手を誘う場所ではなからう。場違いも甚だしい。このまま帰ってもいいだろうか、と思いつながらも、彩は引き返せないまま開かれたドアの向こうへと足を踏み入れた。

「いらっしやあい」

ドアの向こうから彩を出迎えたのは、すっとんきょうな声だった。場所は高級感に溢れていても、本人の雰囲気はそうでもないらしい。けれど、それは彩の期待を裏切らないものでもあって、何となくほっとした。どんな場所であろうとも、彼は彼なのだ。彩が受けた印象のまま、そこに彼はいた。

ここの雰囲気、どうにも思っていたものとは違って、知らず緊張していたのかもしれない。それが、貴樹の周囲とはそぐわない態度で少しだけほぐれた。

「来てくれてありがとう！　　すっごく嬉しいよ！　　もしかしたら、二度と会ってもらえないかと思ってたから！」

にこにこしながら、正面のテーブルに座った貴樹が彩を見ている。

ほら、座って座って、なんて促されて、彩は内心どうするべきか迷いながらも、貴樹の言葉に従うしかない。

やはり、場違いだ。

こんな場所で、二人で個室にこもるなんて、何だか誤解して下さいと言わんばかりな気がしてならない。誰の誤解を警戒しているのかと言われてもわからないが、何となく、そんな気がした。

「ごめんね、俺の都合のいい場所に呼び出したりして。あ、でも、変なことは心配しないでもいいよ。ここはよく使う場所だし、俺の事情も知っているからさ。ちょっと事情があつて、大勢の人がいる所で食事をするのが苦手なんだよね。あ、それで、何がいい？俺、勝手にコース頼んじゃったんだけど、苦手なものとかあったりする？ 変えなくてもいいなら、ここからワイン選んで」

一人でマシンガンのようにまくし立てて、貴樹は手にしていたワインリストを彩へと差し出した。

彩はそれに圧倒されつつも苦笑して、そのリストを軽く押し戻す。「悪いけど、私、あまりワインが得意じゃないから」

「あ、そうなの？ じゃあ、飲みやすくて料理に合うものを適当に持ってきて」

リストを店員に返しながらかう言つて、貴樹は落ち着きなさそうに視線を宙にさまよわせた。

こういった場に慣れていることは事実のようだが、落ち着きがないのも、また彼の揺るぎない事実なのだろう。

席について少しばかり冷静さを取り戻すと、周囲のことを考える余裕も生まれてきて、彩はじつと貴樹を観察する。

初めて会った時の印象の通り、基本的に落ち着きのなさそうな頭のネジが緩んでいそうなタイプだ。そこはかとなく派手な印象を受ける見た目も、変わらない。だが、メールの文面の印象は違つていて、彼はとても生真面目な人間に思えた。

テーブルの上で組まれた、男性にしては細くてしなやかな指が落ち着きなく動く。右の中指に嵌められた大振りのシルバーのリングは、決して邪魔にはならず彼の趣味のよさを教える。身に着けたスーツは黒を基調にした品のいいもので、シルバーのアクセサリーがそれにわずかな華やかさを添えていた。

印象が、一致しない。

それがいいのか悪いのか、彩にはよくわからないままだ。

「ここね、結構美味しいんだよ。俺、何度か来ているんだけどさ、個室もあるから落ち着いて食事ができるし、人の目も気にならないきつと、君も気に入ると思うな」

どういうわけか、貴樹はやたら上機嫌だ。落ち着きなく喋っているのは変わらないけれど、不機嫌そうに黙り込まれるよりはよほどいい。

「えつと、それじゃ……自己紹介、ちゃんとした方がいいかな。俺は、東城貴樹。年は……えつと、二十七！ 君は？」

と聞いてから、貴樹は「あつ」と声を上げた。

「女性に年齢を聞いちゃいけないだった……」

それまではしゃいでいたのが、急にしょんぼりとして貴樹は肩を落とす。

「ごめんなさい、今のなしで」

「……別に、気にしませんよ。でも、答えません」

二十七ということは、彩よりも四歳は年上だ。意外と年齢が上だったことに驚いたが、それは黙っておくことにする。

「えと、怒っていませんか……？」

「怒ると言うなら、前回のことの方が失礼だと思いますけど。あれについて、言い訳とかはないんですか？」

少し意地の悪い言い方をしてじろりと視線を向ければ、貴樹は目に見えてうろたえた。

「……えーと、あれは……その、ちょっと、事情が。いろいろと込み合っていて、そのう……」

あくまでも、詳しい事情を話すつもりはないらしい。それでも、目を伏せてしどろもどろになりつつも、貴樹は反応を伺うように彩を見る。その様子がまるで飼い主のご機嫌を窺う犬のように見えて、彩は思わず噴き出してしまった。

犬だ。

犬がいる。

一度そう思ってしまうと、彼のうなじで揺れる緩く編まれた三つ編みが尻尾にしか見えて来なくなってしまうと、笑いが止まらなくなる。

「え、えっ、何で笑うの!？」

途端におろおろとし始める貴樹に、更におかしくなる。

我ながら不躰だったな、と反省しつつも、彩は笑いすぎて目尻に滲んだ涙を拭った。

「……いえ、ちょっと、おかしくて。あなた、犬っぽいって言われることがないですか？」

「よくわかるね! いつとも言われる! 血統書つきのバカ犬だとか、そういうふうには」

それはバカにしているのと紙一重のように思えるが、確かに、その喩えは間違っていない。どう見ても、彼の印象は犬にしか見えない。

わふわふと尻尾を振りちぎりながら押し掛かってくる、愛想はいが少しばかり頭の悪そうな血統書付きのもふもふだ。

何だか、いろいろと力が抜けてしまった。

本当は、この前のことを追及してやろうかと思っていたのだ。いきなりあんなことをされて、一人の時間を邪魔されて、その理由くらは聞いてみたいものだ、と。

だが、どうでもよくなってきた気がする。と言うよりも、毒気が抜かれてしまった、とでも言うべきか。

「えっと……あの、この前は申し訳ありませんでした!」

いきなり、貴樹はがばつと頭を下げた。驚く彩を見上げて、困ったように小首を傾げる。

「もう、怒ってない……よ、ね……?」

ダメだ。

犬に、負けた。完敗だ。怒っていたとしても、こんな表情を見せられたら全てがどうでもよくなる。

「……今でも怒っていたら、こんな所にこのこ来たりはしないと思いますけど」

「よ、よかった……!」

本気でほっとしたらしく、貴樹はふにやりと相好を崩した。

黙っていればそこにカッコいい部類に入るだろうに、喋ったり笑ったりするだけでイメージが変わる。たぶん、彼はそれなりにもてるのだろうか、と、彩は思った。

だが、そんなもてる男が、何故、自分を食事に誘うのか。

先日の謝罪という理由があるにしても、それならば、何も個室でディナーでなくとも充分だ。

やがて料理が運ばれてくるとなると、彩は何だか疲労感さえ覚えてしまう。従業員は仕事だからこっちが気にするほど人のことなど見ていないのだろうが、やはり、こんな個室でディナーというのは、気の張るものでしかない。

「……あれ、こういうの、嫌い?」

彩の様子に不安になったのか、またしても急にしょんぼりした声音になった貴樹が妙におかしくて、彩は慌てて首を横に振った。

「そういうわけではないです。ただ、こういう席って慣れていないから、緊張してしまっただけ」

「そうかなあ。でも、彩さんは可愛いから、誰も気にしないと思うよ!」

「はあ?」

その切り返しは、意味がわからない。可愛いと言うのなら、犬っぽい貴樹の方がよほど可愛く見える。

おそらく、貴樹には悪気がないのだろう。純粹に褒めてくれているのだから、わかる。

「……えっと、ごめんなさい」

「え、何で謝るんですか?」

「だって、俺、今、すごく不躰なことしたよね。本当は、彩さんがここに来てくれたことだって、俺は感謝しなくちゃならないのに、

勝手にべらべら喋って……。何か変なこと考えているって思われちゃうかな、って」

「変なことって」

「誓って！ そんなこと、ないから！ 俺、自分が胡散臭い外見なのは知ってるし、たぶん、この前のことで彩さんには迷惑かけたから、俺のこと信用ならないって思われても仕方ないとは思ってる。

でも、俺は、彩さんと友だちになりたいんだ。そういうのは、ダメ……ですか。あ、いや、その、えと、だから」

言い訳をしているうちに、自分でも何を言っているのかわからなくなってきたのだろう。貴樹は時折首を傾げながらも懸命に言葉を重ねて来る。

その様子は、まるで宿題を忘れたことに対しての言い訳を一生懸命に考えている子供のようで、彩はまたしても噴き出してしまった。

「……あの、彩、さん……？」

「何だか、東城さん、最初とすぐイメージが違いますね」

「え、そ、そうですか？」

妙にそわそわとしとしている貴樹に苦笑する。何をそんなに慌てているのか、不思議でたまらない。こんな場所に呼び出されて二人きりになって、警戒して挙動不審になるとすれば、彩の方だというのは。

「最初はね、すごく頭が悪そうに見えましたから……その、あんな感じでしたし」

「ご、ごめんなさい」

「それは、それぞれに事情があることだから、別にいいんです。でも、あの時、いきなりフィギュアとか出したでしょう？ それで、何だか怒っているのもバカバカしくなって来ちゃって」

「ふぉえ」

いきなり、貴樹が変な声を出す。どうやら、ワインでむせたらしい。だが、すぐに気を取り直したように口を開いた。

「あ、あれは、厳密に言うとなフィギュアじゃなくて」

「は？」

何となく不穏な単語が飛び出してきたことに、彩は眉をひそめる。この会話のパターンは、大輔とのそれを思い起こさせる。彼が延々と大好きなあれそれについて語り、彩はハイハイとひたすら相槌を打って話を合わせるという、微妙な苦行の。

大輔のことは好きだし、大事な幼馴染だ。彼の好きなものをバカにするつもりもないのだが、さすがにそればかり聞かされるのも疲れて来る。

スイート何とかというアニメは、大輔にとって大切な作品なのだ。あれは、彼がキャラクターをデザインしたもので初めてそこそこにヒットした作品で、彼はものすごく大事にしている。その愛情が行き過ぎて、時折、理解不能なほどに。貴樹の最初の反応からしてあれが好きなのは確かだろうから、大輔が知ったら小躍りして喜ぶに違いない。二人揃ったら鬱陶しいことこの上なだそうだが。

「あ、いや、その」

彩の反応が気にかかったのか、貴樹は目に見えてうろたえた。大輔もそうだが、話はしたいが馬鹿にされたくはないという葛藤があるのだろう。

「大輔が……ああ、大輔ってのは私の幼馴染ですけど、あなたが見つけたあの葉、あれは、彼の悪戯なの。だから、私自身は興味があるわけではないんだけど……あなたがあれに反応したのが、ちょっと、面白かったんです」

「幼馴染……」

「うん、そう。私は詳しくないけど、彼、御坂大輔^{みさかだいすけ}って」

「まさか、キャラデザのミサカダイスケ!？」

言いかけた彩の台詞を遮り、貴樹が叫んだ。

「たぶん、そうだと思う……けど……」

いきなり目をキラキラとさせ始めた貴樹に、彩は面食らう。それまでもにこのことしていたのは変わらないが、これまでとは表情がまるで違う。そんなにもスイート何とかが好きなのか、と、的外れ

なことで感心してしまう彩である。

だけど、そんな彼の変わりようが可愛いとも思った。

取り澄ましたような表情も、派手に見える軽そうな外見も、全て吹っ飛ばしてしまうほどに、その表情は彼の素を現しているように思えたからだった。

「さ、サインとか、もらえたりする！？ ああ、でも、そんな図々しいこと言ったら俺は人として」

「そ、そんなに好きなの？」

「そりゃ、好きだよ！ あすかたんは俺のよ——」

そう言いかけて、貴樹ははっとしたように口をつぐんだ。そこで、ちょうどメインの料理が運ばれてきたからだ。

慌てたように周囲を見回して、貴樹は居住まいを正した。そこには、ほんの少し前まで興奮していた彼の面影はどこにもない。子供のように目を輝かせて大輔のことを聞いてきた彼は、一瞬でその姿を引っ込めてしまっていた。

それが、少し寂しい気がした。そうやって取り繕ってしまうのは、大人の処世術なのだろう。そういう趣味を堂々と言うことは恥ずかしいとされるのが一般的だから、きっと、彼もそう思っていることなのだ。大輔のようにそれを仕事にし、いつでも胸を張って話している人の方が少数派なのだから。

せっかく会話が進もうとしていたのに、途切れてしまっていた。

メインを運んできた従業員が席を外しても、今更、同じ話を始める空気はどこにも見つけられない。

そうなってしまうと、美味しいはずの料理も味気なく感じてくるから不思議だった。

どうするべきか、もう一度どうにか会話の糸口を探すべきか、とさり気なさを取り繕った顔で思案している彩の前で、貴樹は貴樹で、全く別のことを考えていた。

（どうしよう、俺、調子に乗って馬鹿なこと口走った……！！）

表面上は呑気な様子を取り繕ってはいても、貴樹の心中は最初か

らかなりの不審者モードだった。もし、貴樹の心の中を覗ける人間がいたとしたら、即座に通報されてしまいそうなくらいに。

それが、彩が『スイートキューティ』の話題を出してきたことで、一瞬、素の自分が思いっきり出た。隠しようもなく、出してしまった。

いや、もとより彩に対して隠すつもりもないし、最初のアレでばれてしまっているのだから、今更なのかもしれない。それでも、今日だけはカッコよくスマートに印象付けようと思っていたのに。

彩の幼馴染の話に思わず食いついてしまったのは、ファンとしては仕方のないことだと認める。貴樹ではなくとも、ファンであればあの状況で興奮せずにはいられないだろう。何しろ、キャラクターデザインを務めたミサカダイスケは、ファンにとっては神なのだ。

だが、あれでは、まるでそれだけが目当てのバカなオタクではないか。もし、彩にそう思われていたとしたら、地球の裏側まで穴を掘って埋まってしまいたい。

あそこでメインが運ばれてきて、正直、助かった。咄嗟に口をつぐみ、不自然な形で会話は途切れてしまったが、あれ以上の失態を披露せずに済んだからだ。もちろん、ここはREAL MODEの東城貴樹で来ることも多々あるわけで、そんな話をしていたことが面白おかしく吹聴されてしまっても困る、という事情もある。けれど、こういう場所の従業員は洗練されているから、客の個人的な会話の内容までを外に漏らすようなことはないはずだと思っただけでも、警戒だけは怠らない。それは、ここ数年の生活の中で身に着けてしまった、悲しいまでの習慣だった。

そんなことばかりを考えていたから、貴樹だって、ちっとも味なんてわかっていなかった。

美味しいでしょ、と、もっともらしく尋ねてはみるけれど、尋ねた貴樹自身が美味しいのかどうかもわかっていないのだから、何とも頼りない限りである。

立场上、華やかに思われがちだが、貴樹はあまり恋愛には縁がな

かった。イメージという問題もあるし、スケジュールも詰まっているから、安易に女性とは付き合えないという理由もあるが、そもそも、知り合う機会がない。

こんなふうに出る前に、それでも、恋人がいた。だが、人気が出るにつれてスケジュールが過密になり、自然に彼女と会う時間も減って行き、あまり連絡を取れないでいるうちに愛想を尽かされてしまった。彼女は、？ REAL MODEの東城貴樹？という存在には重きを置いていなかった。それどころか、価値があるとは思っていなかったのだろう。人気が出たら捨てられたも同然だから、きっと、そうだったのだ。

人気が出たことで、知りもしない女の子から声をかけられることは増えたのに、彼女はいなくなってしまったから。

彩とそういう関係になりたい、とか、今のところ、そんなことまでは考えていなかった。彩は可愛い顔立ちをしていたし、貴樹のことを芸能人というフィルターで見ない。たぶん、さっきの発言だって笑って流してくれる。そんな気がする。だけど、そうだからと言って、今すぐ彼女に恋するかなと言えば、それはわからなかった。

それでも、予感がした。

きっと、自分は彼女を好きになる。そんなひそやかな確信が生まれるのに、時間は要らなかった。

結局、双方がぎこちないままの食事は、それなりの会話を成立させ、最後には次の連絡をするという約束を交わして終わりを告げた。それは、貴樹にとって想定外の成果であったことは、言うまでもない。

3 (後書き)

貴樹が持っていたのは、フィギュアではなくねんどろいど。

その、翌日のこと。

貴樹は、事務所で次のツアーについての打ち合わせをしていた。ツアーについて回るサポート・メンバーとの最終的な打ち合わせや、総合プロデューサーである天宮も交えての最終確認など、やることは山のようにあった。

ツアーの日程は、もう随分と前から決まっていたことで、チケットはファンクラブ内だけでほぼ完売状態と聞いている。一般発売がこれから行われる場所もあるらしいが、それで手にすることのできる人数は限られているらしい。

本格的なりハーサルに入るまでにはまだ時間があるが、既に秒読み段階と言ってもいい。今日の打ち合わせは、何度目と数えるのもわからないくらいに積み重ねられてきた話し合いのひとつだった。それぞれに意見を出し合い、ライブの細かい点を打ち合わせて行く。それは濃密な時間で、ライブという空間が好きな貴樹にとっては楽しいものだった。

すると、突然。

話し合いの中でメインとなっているはずだった天宮が、急に言葉を止めた。

「……どうしたの、順平ちゃん」

いきなり止まった会話の流れにきょとんとして、貴樹が顔を上げて天宮に問いかける。天宮は意地悪そうに少しだけ唇の端を上げて薄く笑い、意味ありげに隣と目配せを交わす。

「な、何だよ、感じ悪いな！」

ムツとした貴樹が抗議の声を上げるのを聞き流して、天宮は机に頬杖をついた。

「……貴樹さあ、今日、妙にテンション高くない？」

「へ？ え、そう？」

「昨日、撮影の後、挨拶もそこそこにすっ飛んで帰ったって、栗ちゃんに聞いたんだけどさ。それと、関係ありますかくりはらかずこね？」

栗ちゃんというのは、貴樹のマネージャーである。栗原和子くりはらかずこというのが彼女の本名だが、ここでは誰もその名で呼ぶことはない。メンバーの中では、栗ちゃんくりちゃんで通用する。いや、今の問題はそんなことではなかった。

余計なことを喋りやがって、と思いつつも貴樹が栗原をにらみつけると、彼女は無関係だとも言いたげに視線をそらした。

この裏切り者、と、貴樹は内心悲鳴を上げつつ、頭の中で目まぐるしく言い訳を考える。天宮が何を考えているのか、何をしようとしているのか、推し量れないほど付き合いが短いわけでもないのだ。そんな貴樹の心の内を知ってか知らずか（おそらくは後者だ）、天宮はやけに楽しそうな満面の笑みを浮かべた。彼がこういう表情をする時に何が起こるのかは、大抵決まっている。ここにいるメンバーのうちの誰かが、彼の吊るし上げを食らうのである。そして、そのターゲットは高確率で貴樹だと決まっていた。

今日の犠牲も、どうやらそこで決定らしい。

「……そつ、そそそそれは、何の関係もな……」

そんな言い訳をするだけ無駄だと思いつつも、貴樹は何とか回避しようとする無駄な抵抗を試みる。

いつになく裏返った声音と妙につつかえた物言いとで、何かありますと宣言しているようなものだ。案の定、天宮はにたりと笑みを深めた。

「っつーか、貴樹、お前、俺さまに隠し事をしてもいいと思っ
てんの？」

「……や、思っていないですけど……」

「んじゃ、吐け。キリキリと吐け。今すぐにな。その、妙に高いテンションの理由は何だ？」

「嫌だ。言わない」

貴樹はそう言いきって、言ってたまるかとばかりに天宮の視線か

ら逃れてそっぽを向いた。

女に手が早くて飽きるのも早い、という評判のこのプロデューサーに、彩の存在を知られてなるものか、と思ったのだ。

たとえば、彩が貴樹の恋人であったとしても、それを横からかつさらって行くようなえげつない真似は、とりあえず、この男に関してはありえないだろうと思っている。その程度の信頼関係は築いているし、天宮だってそんなことでこのプロジェクトに亀裂を入れるようなことはしないはずだ。だが、それをネタにしてねちっこくしつつこくからかわれるであろうことは必須であり、それだけは避けたかった。

……いや、もはや、この話題が出た時点で遅いとも思わなくはないのだけれど。

天宮の笑みは、既に玩具を見つけた時のそれを大差ない。

「……その笑い方、怖いんですけど」

「そうか？ 俺は笑顔が素敵ですとよく言われるんだがな？」

「あんたの笑顔は胡散臭いですよ！」

「ほう、東城貴樹くん、君はプロデューサーさまに逆らうのかね？」

「逆らうとか、そういうんじゃない、俺はあんたの玩具じゃないっての！」

「順平ちゃん、貴樹の携帯は確保しましたよ。履歴もばっちり残ってます」

別の方向から、別の声がとんでもないことを言っているのが聞こえ、貴樹は驚いてそちらを振り向いた。

「あああああ！！ お、俺の携帯！！」

打ち合わせの最中に携帯が鳴っては困る、と律儀に考えて、ご丁寧に電源まで切って自分から離れた場所に置いたカバンに入れておいたのがまずかった。貴樹が天宮との会話に意識を奪われている間に、それを聞いたメンバーの一人が勝手にカバンから携帯を取り出し、電源を入れた挙げ句、履歴をチェックしようとしている瞬間だった。

「返せよ！」

焦って飛びつくようにして、その手から携帯を奪い取る。

にやにやする相手を睨みつけて、携帯を胸元に抱え込んだ。

持ち主に無断で携帯を手にしたのは、ツアーのサポート・メンバーであるギタリストの沢口彰だ。さわぐちあきら彼は貴樹に奪い返されたのが心外であつたらしく、やけに不満そうな顔で貴樹を見据えた。

心外なのはこっちの方だ、と、貴樹は心の中で愚痴る。

このメンバーは気心も知れているし、大好きだ。しかし、人をからかうことを何よりも楽しんでいる天宮の下では、貴樹のヒエラルキーは一番下だ。世間的に見れば、メイン・ヴォーカルである貴樹がこのプロジェクトを引っ張っているように見えているのかもしれないが、実際は逆である。貴樹は天宮の体のいい玩具と化していることが多いのだ。

そんな天宮の号令があれば、貴樹のプライバシーなどどこ吹く風となる。油断も隙もないとは、正にこのことだった。

大体、貴樹の感覚からすれば、今は真剣な仕事なのだ。だから、携帯の電源も切っていたし、そういうふざけたことはしてはならないと思っている。なのに、天宮にかかれば真剣さなどあつという間にどこかに吹き飛んでしまう。根が真面目でバカ正直な貴樹は、そのたびに天宮の餌食である。

ここの連中に正論を説いてみたって意味がない。そんなことは、今までの経験で嫌と言うほどわかっているはずなのに、つい反論を試みる。

「な、なんで、人の携帯を勝手に見るんだよ！ それに、今は打ち合わせ中じゃないか！」

「関係ないだろ。気になるから見るんだよ。可愛い貴樹くんが色気づいたのかと思うと、俺としては心配で夜も眠れないね。前の彼女にこっぴどく振られたの、忘れたわけじゃないだろ？」

天宮がそう言うと、沢口が同意するように大きくうなずいた。

「そうそう、いきなり出て行っちゃったんだよねえ。同棲までして

たのにさ。貴樹、あの後、かなり落ち込んでたじゃないか」

「あー、そうだったそうだった。REAL MODEの東城貴樹に用はないんだっけ？ ひどいこと言うよねえ」

頼みもしないのに、人の古傷を抉るようなことをほざき、にやにやと笑う天宮。どっちがひどいんだ、あんたが鬼だと思うが、天宮のことを嫌いになれるわけではない。口ではこんなことを言っているが、あの時、貴樹のことを誰よりも心配して憤慨してくれたのは、天宮だからだ。

それでも、時折、殺意が芽生えることに違いはない。彼のことは好きだし、好きと言うよりもむしろ尊敬に近い目で見ているのだが、こういう時は本気で憎らしい。

この人たちの前で気を抜けば、何をされるかわかったものではない、と、貴樹は思っている。それでも、性懲りもなく毎度ターゲットにされてしまうのは、貴樹がこのメンバーを信頼していて無意識に気を抜いてしまっているからなのだろう。

貴樹は無然として元の席に戻り、がたと大きな音を立てて椅子に引いた。そこにいた全員の視線が一斉に貴樹に集中したが、それを払いのけるように口を開く。

「時間、あり余っているわけじゃないでしょ。打ち合わせ、続きませんか」

表情を崩さずに、貴樹はそう言う。

だが、その瞬間に返ってきたのは、まるで責任転嫁のような台詞だ。

「いや、俺も、打ち合わせを続けたいのは同意んだけどさ。何しろ、昨日のことが気になっちゃってねえ」

「そ、それは俺のせいじゃないですよね!？」

「うーん、貴樹のせいかなあ？」

そんな天宮の楽しそうな声を無視して座ろうとして腰を落としかけたところを、いきなり音もなく近づいてきた相手に羽交い絞めにかかる。そっちに気を取られた隙に、脇から天宮が手を伸ばして貴

樹の携帯を奪い取った。

「……さて」

「さて、じゃねえだろっ！ 俺のプライバシーは無視か!？」

「なーに寝言を言ってるの。俺たちは、純粹に貴樹を心配してるんだよ？ さー、沢くん、俺がチェックしている間、そのアホ犬押さえといて」

「アホ犬って言うなあ!」

「どうせ、履歴を消すとか、ロックをかけるとか、そういう真似はしていないんだろ。可愛いね、貴樹は」

「ぎゃあぎゃあ騒ぐ貴樹を横目に、天宮は携帯を楽しそうに開く。今ほど、きちんとロックを掛ける習慣を持っていなかったことを悔やんだことはない。貴樹の身体を拘束する沢口の力は強く、振りほどけない。じたばたと暴れても、拘束する腕の力が緩むことはなかった。無駄だとわかってはいても、暴れるのをやめることはできなかったけれど。」

「今後は、ちゃんと暗証番号つきでロックをかけるべきだ。でないと、次にはメールを見られるどころか、周囲に転送されてばら撒かれてしまいそうだ。」

「最新のメールの送信先……へえ、女か？」

「返せてば!」

「貴樹が最初から素直にこれを渡せば、俺たちだって乱暴なことはいらないんだよ?」

「まるで、今の状況は貴樹が悪いかのような言い草である。天宮のこういう態度は今に始まったことではないが、毎度玩具にされる貴樹にしてみればたまったものではない。」

「そ、それって俺のせいなの?」

「無駄な抗議を、さっきから何度繰り返しているだろう。貴樹はそう思いながらも、なけなしの抵抗を試みる。ここで屈してしまうのは、次からは更なる玩具扱いが待っているに決まっているのだ。」

「大体さ、昨日の時点で警戒しないわけ？ 普段は身なりにろくに

気も使わない、たまにお前どこのオタクだよってな格好をしている貴樹が、だよ。昨日に限って、撮影の後にメイクも直さず、衣装さんに揃えてもらった服をそのまま引き取って帰るってのがおかしいことくらい、バカでもわかるだろうっての。その理由を邪推したくなるのは、人として当然だろう？ どうせ、女絡みだろ。ああん？」

「順平ちゃんに関係ないだろ！ 昨日は、たまたまそういう気分です」「たまたま、そういう気分？ やっちゃんにお願いしたんでしょ。」

これから出かけるから、いい印象を与えるメイクをして、って」

安野のヤツ、そんなことまでこいつに喋ったのか！

貴樹は、内緒にしておいてくれと頼んだはずの秘密が、既に全く機能していないことに気づいて、うなだれた。

やっちゃんこと安野^{やすの}泰司は、貴樹のヘアメイク担当のスタッフだ。彼がいるからこそ、REAL MODEの東城貴樹のメイン・ヴィジュアルが完成しているのだと言っても、過言ではない。彼の存在は欠かせないし、だからこそ、彼の技術には絶対の信頼を置いている。

だから、昨日。

撮影の合間の控え室で、貴樹はこっそりと安野に頼んだのだ。少しでも彩に好印象を与えたいと思ったけれど、自分でそういう演出をすることにまるで自信がなかったから、つい手近にいるプロに頼んでしまった。とは言え、安野は身内も同然のスタッフである。遠からず天宮には知られるだろうとは思ってはいたが、昨日の今日とは早すぎる。

それでも、それを甘受して天宮の言いなりになっているほど、貴樹も気弱ではいられない。

「強情になるのは、感心しないなあ、貴樹くん？ そんなふうにかいっぱい否定されちゃうとさ、余計に詮索したくなるのが人間ってもんなんだよねえ」

その理屈は確かに正しいのかもしれないが、甚だ自分本位であると思えない。

と、その時。

「いい加減にしなさいよ、あんたたち！」

それまで黙ったままで事の成り行きを見守っていたマネージャーの栗原が、たまりかねたように叫んだ。

「今は、何の時間かしらねえ、天宮？ 打ち合わせの時間だったよ
うな気がするの、私の勘違いかしら？ すぐに悪ふざけは終わる
かと思っていたけど、いつになったら脱線は修正されるの！ どう
して、あんたたちはそうもいい加減かなあ！？」

「そんなこと言ってるけどさ、栗ちゃん。昨日の夜、一番知りたそ
うにしてそわそわしてたの、自分だってわかってる？ 明日、貴樹
吊るし上げようぜーって息巻いてたのも栗ちゃんだし。何と言って
も、栗ちゃんがREAL MODEの東城貴樹のイメージを作り上
げたんだし」

「確かにね、私が気にしているのは事実よ。でも、東城くんの恋愛
沙汰よりも、今はツアーの最終打ち合わせの方が大事でしょ？ R
EAL MODE初挑戦の全県ツアー、しかも、半年で六十本近い
ライブをこなさなきゃならない。くだらない騒ぎを起こして打ち合
わせの進行を邪魔するなら、たとえ天宮でも許さないからね」

「うわあ、栗ちゃんこわーい。まあ、そう言われたら仕方ないね。

真面目にお仕事に戻りましょー！」

「それから、東城くん」

「……はい」

「別に、うちは恋愛を禁止してないわ。でも、今の自分の立場を考
えて行動するのを忘れないでね。体調管理も、イメージを保つこと
も、あなたの大事な仕事よ」

「わかってます」

「はい、じゃあ、続けるわよ！」

至極尤もなマネージャーのとりなしには納得したのか、天宮も真
面目な表情に戻って椅子に座り、それぞれに意見を出し合って話し
合いが再開される。一瞬前までふざけたことをしていても、こうし

て即座に切り替えができるところが天宮のすごいところであり、このメンバーの尊敬できる部分だ。

そんな気心の知れたメンバーの熱の籠もった議論を眺めながら、貴樹は間近に迫りつつある次のツアーに思いを巡らせる。

（ツアーか……）

REAL MODEは、もうすぐデビュー五周年を迎えようとしている。

これまでも全国ツアーを回ったことはあるが、今回ほど大掛かりなツアーは初めての試みだった。各地のアリーナクラスでの二日間公演を含む、全五十八本の大規模な全県ツアー。今現在の売り上げと集客数があるからこそ、チャレンジできるものだ。今まで以上に緊張するし、打ち合わせも真剣に取り組まざるを得ないことはわかってる。

でも。

どうしても、気になる。引っ掛かってしまう。

それは、もちろん彩のことだった。

結局、貴樹は自分がどんな仕事をしているのかということを話すことができなかった。せっかく得ることのできた、REAL MODEの東城貴樹というイメージを知らない友だち。初めて、自分から誘って親しくなってみたいと思った女性。

言えるはずが、なかった。いや、言おうとは思ったけれど、言えないまま終わってしまった。

彩から仕事を聞かれて、「フリーでいろいろ」などと曖昧に答えたくらいで、それでは全く答えにはなっていない。フリーで働いているという意味では間違いではないかもしれないが、限りなく嘘に近い答えであることは自覚している。

たぶん、自分は、彩に惹かれ始めている。きっと、そうだと思っている。

そうでなければ、食事になんて誘ったりしない。それは、充分すぎるほどに理解しているし、だからこそ、知られたくないとも思っ

ただ。彩にだけは、そんなフィルターを通して自分を見て欲しくなかった。素の自分を、知って欲しかった。

「……ダメだ、ありゃ。頭がお花畑じゃね？」

天宮の呆れた声が、溜め息に重なる。

明後日の方向を見て溜め息をつく貴樹を見て、天宮は肩をすくめた。

「あれ、彩。何だか楽しそうだね」

大輔から仕事で近くに来たから一緒に食事をしようとメールがあつて、彩は二つ返事で了承した。

特に用事がなければ、大輔からの誘いを断ることはない。大輔との会話での話題が本当の意味で噛み合うことはほとんどないのだが、それでも、気心の知れた友人である事実には変わりはない。それに、お互いに実家から離れている身としては、何となく大輔との仲を疎遠にはしたくないという感情があるのだ。

それに、大輔に会ったらちよつとだけ頼みたいことがあつた、というのもある。

先日、貴樹と初めて食事に言った時に、彼が口を滑らせた「サインがもらえないか」という台詞を、彩は覚えていたからだ。

待ち合わせ場所に入つて来るなり、大輔は彩を楽しそうだと評した。自分ではそのつもりはないのだが、そんなに楽しそうに見えるのだろうか。

「そう見える？」

「うん、見える。彩のそういう感じ、久々に見たかも」

そう言いながら大輔は彩の向かいに腰を下ろし、注文を取りに来た店員にちよつと待って、と声をかけた。

「彩はごはん食べた？」

「ううん、大輔が来てから決めようかと思って」

「ごめん、誘つたくせに遅れて」

「大丈夫、そんなに待ってないし」

「ふうん……まあ、それならいいけど」

大輔はメニューを開いてひとしきり悩んでから再びウェイトレスを呼び、注文を告げる。彩も同じように注文すると、大輔は一息ついて水を一気に飲み干した。

「……相変わらず食べるねえ」

「んー、ここ数日、家に籠もってたからさ。今朝納品したばかりで、ろくなもん食ってなかった」

「それって、例のスイート何とかってアニメの仕事？」

「それもあるけど、何、彩も興味持ってくれたの!？」

見当違いのことで目を輝かせた大輔に、彩は溜め息をつく。

「そうじゃないってば。まあ、興味があるってのは、完全な間違いってわけでもないのかもしれないけど……」

興味があるのは、スイート何とかを好きだと言っている『東城貴樹』という存在に対して、だ。その興味がどういう名前のつくものなのか、彩自身、自分の感情をきちんと把握してはいなかった。

「オトコか？」

にやにやと笑いながら、大輔が聞く。

「何でそうなるの」

「だって、彩は俺の仕事になんか欠片も興味ないだろ」

「う……」

それは事実なので、言い返せない。彩は目を泳がせ、次の言葉を探す。

「でも、別に、右から左に聞き流しているわけじゃないけど」

「そんなのわかってるよ。でなけりゃ、俺と幼馴染してないと思うし。……で」

そう言って、大輔はにやりと笑った。

「スイートキューティに興味があるってことは、そいつもオタクか？」

「たぶん……」

「たぶんって、何じゃそりゃ」

「だって、知り合ったばかりだし、よくわからないんだよね。でも、あんたの絵が好きなのは本当だと思う」

「……ちよっと待て。そもそも、オタクのそいつと彩が知り合うきっかけってのが思いつかないんだが」

大輔の中では、まだ見ぬ貴樹は勝手にオタク認定されたらしく、大輔は首をひねった。

「まあ、俺の絵を好きだって言ってくれてるのは歓迎なんだが……」
「本当に偶然なんだよ。だから、自分でもわけわかんない。偶然だし、その上失礼だし、でも……」

「運命の出会いだと感じてしまうくらいにときめいた？」

「そ、そんなわけないでしょ！」

その時、彩の携帯がメールの着信を知らせる。大輔に一言断って画面を見れば、相手は貴樹だった。

内容は前回のお礼と、また機会があったら会いたいという簡単なメールだった。たったそれだけのことなのに、何故か、妙に浮き足立った気持ちに襲われる。

携帯を閉じた彩は、目の前の大輔がニヤニヤしてこちらを見ているのに気づいて彼を睨んだ。

「何よ」

「……いや、嬉しそうだな、と思って」

「そんなこと」

「あるよ」

と、大輔は彩の言葉を遮る。それから、顎に右手を当てて少し考え込むようにし、にんまりと笑う。

「ちよっと、幼馴染としては、そのつのが気になるなあ。んじや、そいつに会う口実を俺が作ってやろうか」

「は？」

「今度、スイートキューティの関連で原画展やるんだ。その打ち合わせもあって、今日は出て来たんだけどさ。招待券送るから。一般公開前日の」

「え……」

「それと、ラフでよければ一枚くらい描いてやるよ。そいつの好きなキャラ。誰が好きなんだよ？」

「あすか……だと、思う、けど……」

確か、貴樹の口走っていた名前はそれだったはずだ。貴樹との会話を思い出しながらそう答えれば、大輔はふんふんとうなずいた。

「あすかね……おっけ、ちょっと待ってて」

なんて言って、大輔は持っていたカバンからスケッチブックを取り出し、さらさらと描き始める。その表情はいつもとは随分と違って見えて、それが大輔の仕事の顔なんだろうなと思わざるを得ない。

大輔を異性として見たことは残念ながらも無いのだけれど、彼のこういう真剣な表情はとても魅力的だとは思っている。彼に恋人がいないのは不規則な仕事のせいなのか、彼のプライベートのディープさゆえなのか、謎なところだ。

貴樹のことを好きだとか、そういう気持ちは、正直まだわからなかった。

ただ、気になる。メールが来ると、何となく嬉しい。今はまだ、たぶん、それだけなのだ。

最初は、何だこいつ、という気持ちの方が大きかった。

頭の軽そうな、礼儀を知らないヤツ、と思ったことは事実だ。

だが、その後に見せた貴樹の態度は誠実だと思ったし、メールでのやり取りや交わした会話の端々から感じられる彼の性格は、その印象とは逆に生真面目なのかもしれないと思い直すこともできた。

それらを総合すれば、気に入っている、と言うのかもしれない。それが、今すぐに大輔の言うような関係まで飛躍するとは考えられないけれど。

「よし、できた。鉛筆書きの雑で適当なラフだけど、少しは喜ぶんじゃないのか？」

そう言って大輔が差し出したスケッチブックには、見慣れた彼のタッチで可愛い女の子が描かれていた。適当な、と彼自身は言うが、彩にはそのどこが適当で雑なのかがわからない。こういうものは、本当に才能なのだな、と感心するだけだ。

「相変わらず、大輔の絵は肉感がすごいね」

「むっちりして可愛いと言え」

「でも、ありがとう。……うん、あの人、かなり好きみたいだったから、喜ぶかも」

とは言え、この件をどうやって伝えればいいのか、彩は考えあぐねていた。

あんな、彼が途中でやめてしまった会話の端を拾って連絡したというのも、何となく言いづらい。かと言って、彼からの連絡を待っているのも、それはそれで変な気がする。

今までそういうこととほとんど縁がなかっただけに、どうしたらいいのか迷ってしまうのだ。

当の貴樹が、どうしよう、彩さんのこと好きになっちゃったかもしれない……と、似たようなことで平和に悩んでいることなど、彩は知る由もなかった。

そうして、互いに積極的なコンタクトを取るということもなく、日々は過ぎて行った。

そうなるに却って連絡しづらくなるというもので、ツアー前の忙しさもあって、貴樹はますますコンタクトを取るのに躊躇するようになってしまっていた。時間が空けば空くほどどこちなくなるだろうことはわかってはいても、いざ携帯を手にとるとどうしても先に進めない。

そんな、ある日のこと。

今日は外での撮影なんだよなーなどと思いながら、寝ぼけ眼でのろのろと着替えていた貴樹は、いきなり鳴り響いた携帯の着信音にびくっと身体を震わせた。慌てて取り上げてみると、相手はマネージャーの栗原だ。

「もしもし」

「あ、東城くん？」

「ふあい」

手近にあった携帯補助食品の封を切って、口に放り込んでもぐもぐさせながら応答する。行儀が悪いのはわかっているが、時間がなし食事をするのも面倒だから仕方がない。

電話の向こうの栗原は、そんなことを気にした様子もなく、いつものようにきびきびと用件を告げた。

「今日の撮影、中止になったから。それで、オフにするから、今日は一日ゆっくりと休んでいいわよ」

「えっ、何で中止？」

「外、見てないの？ 雨、降ってるのよ。残念ながら、野外での撮影はできないわね」

そう言われて、貴樹は起きてから初めてカーテンを開けた。そうして、窓の外が完全に濡れそぼっていることを知る。

「……ホントだ。すっげー降ってる。あれ、でも、中止？ 延期じゃないくて？」

今日の撮影は外での予定で、雨天の場合はどうするかなんてことは、貴樹は聞いていなかった。それは栗原が把握していることで、貴樹はそれを聞かされてその通りに動くだけだからだ。

「撮影自体は延期よ。でも、今回の撮影はファンクラブの会報用のだから、スタッフにも無茶言えるから。会報に載せる分は、控え室のオフ・ショットで行こうってことになって。最近、ちゃんとお休みあげられていなかったし、休んでちょうだい」

「うわぁ、本当に？ 今日一日休んじゃっていいの!？」

「いいわよー。ここ最近、ずっと、オフなしで頑張っていたし、ご褒美ってことで。ツアーが始まったら、休みたくても休めなくなるんだからね、マネージャー権限でプレゼントよ。ま、これ以降、休めないって覚悟しておいて。キリキリ働いてもらうからね」

それは、嬉しいような、嬉しくないような。栗原の常でない大盤振る舞いの裏には、何だか侮れないものが潜んでいそうで、実は怖

い。

それは、この業界に入って彼女がマネージャーについてからというものの、ずっと感じていることだ。天宮のことも怖いと言えそうなのだが、彼の持つ怖さとは少し違う。

とは言え、久々のオフは嬉しい。仕事が午後から、とか、午前中だけで終わり、とか、そういう変則的なオフはあっても、一日休んでもいいなんて、本当に久しぶりなのだ。たとえ、その後にオフなしの日々が続くのだとわかっていても、ここは喜ぶべきだろう。

何をしようかな、と、貴樹は電話を切ってから考え込む。

雨が降っているのなら、外に出かけるというのはあまり現実的なプランではない。見ていない録画アニメはハードディスクの中に山と入っているし、買ったまま未開封で積んであるゲームもそれこそ10本を超えている。読んでいないマンガも、開いてもいない画集も、積んであるままだ。消化しなければ、そのうち雪崩を起こしそうだ。

それでも、こうして不意に降って沸いたような空白の時間に何を思うかなんて、今は決まっていた。

やりたいことも、やらなければならないことも、たぶん、ある。けれど、何よりも優先させたいことがあることを、知ってしまった。

どうしよう、と考えながら携帯のメモリーをいじって、彩の番号を表示させる。

メールのやり取りはしていたけれど、電話をするのは初めてだ。いきなり誘って、了承してくれるとは限らない。そもそも、彼女が休みだなんてことは偶然の確率に頼るしかない。彼女は会社員だと言っていたはずで、平日にスケジュールが空いているかどうかなんて、ありえないと理性では考えている。なのに、どうしてだかそうした方がいいような気がして。

「……もしもし？」

短いコールで、彩が応答した。

「あのっ、とっ、と東城貴樹です！」

第一声から自分の名前で囁んだ。締まらない始まりだ。だが、そこで後悔したって囁んだ発言が取り消せるわけではない。貴樹は気を取り直し、相手から見えるわけでもないのに携帯を片手に背筋を伸ばす。

「お、おはようございます！」

「……ああ、おはようございます。どうかしたんですか？」

「……あの、今日、暇ですか？」

「は？」

「もし暇なら、えっと……一緒に遊びに行きませんか？」

「……どこへ？」

彩に冷静に突っ込まれて、貴樹はうろたえる。

一緒にどこかに行きたい、ということまでは考えていたが、どこに行くという具体的な案は何も考えていなかったからだ。

「え、えっと……ゆ、遊園地とか？」

彩は一瞬沈黙して、電話の向こうで盛大な溜め息を吐き出した。

「いきなり電話してきて、それなんですか？ 結構な大雨ですけど」

「……えっと、じゃあ、彩さんが行きたい場所があるなら、別にどこでもかまいません！ 俺、車出しますし！」

別に、何が何でも遊園地に行きたいわけではない。どこにと問われて、咄嗟に思いついたのが遊園地だっただけだ。彩が行きたい場所があるのなら、そこに付き合うというのは別に悪くない選択だった。

貴樹が慌ててそう言えば、彩は少し黙り込み、それから、先を続けた。

「ねえ、スイートキューティが好きだって言っていましたよね」

「へ？ え……ああ、はい、そうです」

まさか、彩がその話を覚えていたとは思わず、貴樹はうろたえた。彩は、そのことに関して何を感じているのだろう。あの時、彼女は貴樹に対して何も言わなかった。貴樹が覚えているのは、彼女の

幼馴染がその関係者であると言ったことに、自分が一瞬で舞い上がって我を忘れた恥ずかしい失態だけだ。

だから、彼女がその名前を出して来た時、貴樹は無意識に緊張した。

携帯を握る手が汗ばんで、思わず取り落としそうになる。

「この前、言ったと思いますけど……私の幼馴染が、その、スイートキューティっていうのを描いているんです。それで……その、彼に会う機会があつて、その話をしたら、原画展のチケットをくれたんですけど……もし、今日、暇だつて言うならそれに行きませんか？」

「え……」

ミサカダイスケの原画展の話は、貴樹も知っていた。でも、それは明日からのはずで、今日は招待客しか入れないのではなかったか。「嫌ですか？」

「え、そ、そんなことない、です！」

あまりのことに自分の耳を疑っていた貴樹は、急に不安そうに聞き返してきた彩に我に返り、声を張り上げた。

スケジュール的にも合わないし、行けそうもないと最初から諦めていたイベントだ。それが、こんなタイミングで行くことができるなんて。

「でも、彩さんは仕事……じゃ、ないんですか？」

「……普段はそうだけど、今日は、ちょっと」

偶然でも何でも、よかった。

彼女が会うことを了承してくれて、しかも、自分を偽らないままでいることができる。そのことが嬉しくてたまらなかった。

5 (後書き)

大輔の描く絵のイメージはブリキさん。
出すつもりなかったのに、何か妙に気に入ってしまった大輔。

彩に教えられた自宅の近くまで車で迎えに行って彼女と合流すると、そのまま、目的の場所へと向かった。全く知らない道ではないが、道がわからなくてうろたえるという醜態を晒したくなくて事前にナビにも登録してきたから、無事に目的地付近へと到着する。会場自体に駐車場はなかったから、あらかじめ調べておいた近くのパーキングに停めた。

雨は朝よりは小降りになっていたが、それでも、傘を差さずに歩けるほどではない。

誰にも見つからないといいなあ、と思いつつ、貴樹は車を降りて傘を開いた。

一応、貴樹は変装になっているのかいないのかもわからない伊達メガネを掛けて、帽子を目深にかぶっている。いつもの緩く編んだ三つ編みを隠すのは無理だが、何もしないよりはマシだ。……たぶん。

雨が降っているから傘の下まで覗きこむような人間もそれほどいないだろうし、会場に自分を知っている人間がいるとも思えないし、この程度で何とかなるだろう。

「ねえ、あなた、目が悪かったの？」

「いや……えーと、これはオシヤレです」

へらへらと笑って、何でもないことのように装ってそう誤魔化す。車の中での会話は、思っていたよりもはずんだ。最初こそ敬語で喋っていたものの、それはすぐに気安い空気に変わった。話題は他愛もないものでしかなかったけれど、そんな当たり前のことがひどく嬉しかった。

ここまで来ても、彩は本気で貴樹が芸能人であることに気づいていないらしい。それはそれで新鮮で、嬉しくて、このまま知られないままでもいいと思っていたりするものが、本音だ。そして、そんな

時間が無粋な誰かの手で壊されることがないといいな、と思う。できる限り目立たないようにしようと決めて、彩と並んで会場へ向かう。

貴樹の変装の言い訳を、彩は特に疑ってはいないらしい。そのことにほっとしている自分が何だか情けない気がしたけれど、すぐにそんなことはどうでもよくなった。

会場に着いてイベントの看板を見た途端、貴樹はやたら緊張して来てしまったからだ。

ここに誘ってくれたのは、彩の方だ。だから、彼女は自分のこの趣味を馬鹿にしてはいないのだろうと思うことはできる。それでも不安になってしまう。そのうえで早くナマの原画が見たいと気が急いてしまうのも手伝って、挙動不審になってしまったのである。

「どうかした？」

「……いや、緊張して」

彩が訝しげに尋ねたのに思わず正直に答えると、彼女は驚いたように目を瞬かせる。

「緊張？」

「うん、その……いろいろと」

ももごとと言い訳をしているうちに、会場入り口まで辿り着く。

雨のせいなのか、それとも、招待客しか入れないからなのか、それほど人はいない。落ち着け俺、と念仏のように唱えながら傘を閉じて水滴を払っていると、彩がカバンの中から小さなタオルを取り出した。

「これ」

「え？」

「東城くん、服、濡れてる。拭いておいた方がいいと思う。その服、すごく高そうなブランドだし」

「あ……そ、そう見える？」

実を言うと、今日の服装はスタイリストに選んでもらったものをそのまま着て来ている。要するにズルをしているのだ。それは、自

分に自信がないからだ。今の彩の言葉は自分のセンスを褒められているわけではないから喜んで意味はないのだが、何となく嬉しくなった。

「うん、見える。東城くんって、最初のイメージとかなり違うね」

彩がそう言い出したので、どきりとして彼女を振り向いた。

「そう、見えるかな」

「うん。前にも言ったけど、最初は、あまりいい印象がなかったし」
「……ごめんなさい」

「まあ、あのことはもういいんだけど。それに、今の方が楽しくて好きだな」

好きだな、と言われて、貴樹は舞い上がりそうになる。

彩の言葉はただの好意の表れにしか過ぎないのだとしても、それでも、そう言ってもらえるだけで嬉しかった。

「本当に、イメージがくるくる変わる人だと思うよ」

「そう……なの、かな？」

「最初はどこの馬鹿が来たのかと思ったんだけど……まあ、きちんと話してみれば、さほどでもないよね」

さほどでもない、という言い方は、よくよく考えてみればそこそこ馬鹿だと言われているようなものに思えるが、貴樹にはそれは些細なことだった。

「そうかな」

「うん。面白いと思うし」

面白い、というのが、喜んでいいのか悪いのかはわからないが、嫌われているよりはいい。

「面白い……ねえ」

「私はこういうのにまるで興味がなかったから、大輔に何を言われても来る気になんてならなかったけど、知らないものを見るのは新鮮だと思うよ」

会場内をゆっくりと見て歩きながら、展示されているものについて言葉を交わす。

じっくり見たいのと、彩と喋るのに気を取られそうになるのとで、貴樹の意識は目まぐるしく切り替わる。

うっかりするとスイッチが入って蒔蓄を語ってしまいそうだし、かと言って、黙ったままにいるというのも何だか微妙な空気が漂う。やはり、こういうのは一人で来るべきだと思うが、誘いを断らなかったことを後悔するつもりもない。

様々な想いが交錯して、貴樹の思考回路はほとんど不審者だ。絵を見たり、隣の彩を見たりと、視線の動きが怪しいこと極まりない。招待客しかない日でよかった、と言うべきかもしれない。

話を聞いている限り、彩がこの手のものにほとんど興味が無いと言うのは、事実らしい。ナマの原画の美麗さに興奮のあまり、舞い上がってべらべらと喋りそうになるのを必死で堪えながら、彩から向けられる質問にひとつひとつ答えて行く。幼馴染だというのに、彼女は彼の仕事の内容をほとんど知らないらしく、それを説明するたびに驚くのを見るのは楽しかった。

スケジュール的には、このイベントに来ることすら難しかった。今日が空いたのは偶然だったし、空いていたとしても、彩が招待券を持っていなかったら入ることもできない。もし、奇跡的にこのイベントに来ることができていたとしても一人で見ていただけだったのだから、こんなふうに誰かに話してその場の感想を聞いてもらうというのは、またとない機会だった。

それでも、と疑問に思う。

何故、彩はこのイベントに誘ってくれたのだろう。

確かに彩の幼馴染がミサカダイスケだというのは事実なのだろう。興味がないという彩が、このイベントの招待券を持っていることから、それはわかる。だが、だからと言って、それが貴樹を誘う理由にはならない。もちろん、誘われたのは嬉しかったし、こうして彩が楽しんでいるように見えるのも嬉しいのだけれど、その真意がどこにあるのかを思うと不安になる。

(……やっぱり、俺、彩さんのこと好きになっちゃったのかなあ)

冷静に考えてみると、自分は彩に恋をしているように、思う。彼女の一言が嬉しくて、彼女の隣に立つことが幸せでたまらない。大体、降って沸いた急なオフに彼女に誘いを入れようとする事自体が、その証拠だ。いつもなら、たまのオフに出かけるなんてことを考えたりはしない。録画アニメの消化か、積みゲームを眺めてニヤニヤするか、そんな程度に決まっている。

彩との時間を、もっと持ちたい。今の貴樹の状況が、それを許さないのかもしれないとわかっていても。

それほど混みあっていなかった原画展をゆっくりと見て回ってから、近くにある駅ビルへと食事のために移動した。

そこそこに混んでいる駅ビルの中を話しながら歩いていると、彩が気に入っているというブランドショップを見つけた。そこで買い物をしたという彩に付き合っ何点か選び、彩が会計に並んでいる間、貴樹は人の邪魔にならないように店の外に出ようとする。

その瞬間、入ろうとしてきた制服姿の女の子とぶつかりそうになった。

「あ、すみません」

咄嗟に謝ると、ぶつかりそうになった女子高生と思しき彼女はうつむいていた顔を上げて、貴樹の顔を見た。その表情に、「あれ？」という驚きが浮かんでいる。

やばい、と思うのと同時に帽子を引き下げて、表情を隠す。

だが、彼女は貴樹の顔を見てしまっただろう。目の前の表情が変わったのがわかる。顔を隠したところで、今更だ。

それでも、いきなり声をかけることには躊躇いがあるらしい。彼女が迷っている隙に、貴樹はさっと身を翻して店の外に出た。

心臓の鼓動が速くなる。今のはまずい。おそらく、完全にばれた。視界の端に、彼女が遅れてきたらしい連れの少女と、何やらそこそそと耳打ちしあっている様子が窺える。一人では難しくても、二人になったら声をかけてくる可能性は大きい。

どうしよう、と思う。とにかく、彩に知られる前に何とかしなけ

ればならない。

ちらりと店内へ視線をやれば、会計に手間取っているらしく、彩はこちらに背を向けたままだ。どういう展開になったとしても、今なら彩に知られずに済む。自分一人でなら、どうにでも切り抜けられるはずだった。何か言われたら他人の空似で押し通せばいいし、見つかって声をかけられた時、貴樹はいつもそういう手段で逃げ出していた。オフィシャルで見せている貴樹の雰囲気と、オフの時の貴樹とのギャップがかなりあることから、実はその成功率は高い。追っかけに近いファンにそれは通用しないが、一般人ならそれで通る。

「あの」

嫌な予感というのは、こういう時に限って当たるものだ。

二人になって気が大きくなったのか、押し問答をしていた二人の少女が、店の外に出た貴樹の方へ近づいてきて声をかけた。

「……何」

意識して声色を変えて、いつもとは違う自分を演出する。こんなことで誤魔化せるかどうかなんてわからないけど、やらないよりはいい。

「あのっ、東城貴樹さんですよ。REAL MODEの」

「違います」

間髪入れずに、即答する。

少女たちは顔を見合わせ、更に言い募った。

「え、でも」

「迷惑なんだよね。よく似ているって言われるからさ。君たちみたいに、図々しく声をかけてくるのがたくさんいるし」

「……えっ、あ、あの、ご、ごめんなさい……」

瞬間、泣きそうになった彼女に、ほんの少しだけ良心が痛んだ。これが、彩と一緒にの時でなかったとしたら、もう少し優しく断れたのかもしれない。断らずとも、にっこり笑ってサインの一枚くらい書いてあげて、本当はプライベートの時にこういうことはしないで

欲しいんだって、優しく怒って釘を刺して。

だって、彼女たちは性質の悪い追っかけ行為をしたわけではないし、たまたま見かけて声をかけてしまっただけの、一般の人だと思うから。

だけど。

今は、貴樹はそんなふうに思える余裕がなかった。自分でもおかしいと思うくらいに、他人を思いやれる余裕がなくなっていたのだ。彩に自分のことを知られたくない。その気持ちだけが先走ってしまっただけ、そのことしか考えられなくなっていた。

貴樹に冷たくあしらわれて泣きそうになって去っていく二人組を見送っていると、ようやく会計を終えたらしい彩が店から出てきた。

「……どうかしたの？ 知り合いでもいた？」

「ううん、別に。人違いされただけ。それよりさ、お腹空かない？ 早くご飯食べに行こうよ」

ここには個室があるような高級なレストランはなかったから、テクイクアウトで車の中で食べるか、それとも、移動するか。どっちがいいかなーなんて考えながら、貴樹は戸惑う彩を促して歩き出した。

「順平ちゃん」

「あー？」

しきりにパソコン作業をしていた天宮は、貴樹の呼びかけに反応してめんどくさそうに顔を上げた。

ツアーのリハーサル中である。都内のスタジオを借りて、ステージ上での動きや音の打ち合わせを行う。ちょうどお昼時になったので、他のメンバーは連れ立って食事に出かけていた。

急ぎの仕事が残っているということで休憩時間をずらした天宮と、何となく一緒に出そびれてしまった貴樹だけが、人気がなくなつて静まり返ったスタジオに残っていた。

天宮は作業を中断して貴樹の方へ向き直り、首を傾げる。

「何か用か？」

貴樹が手にしているのは、もうすぐ始まるツアーの日程表だ。ぎつちりと書き込まれたそのスケジュールは、最初に見たときには眩暈がしたものだ。今は見慣れてしまったが、それでも、これをこなすことを考えると不安を覚えることも事実である。

「用っていうわけじゃないんだけど……。俺、ツアー行きたくないなあって……」

「はあ？」

天宮はすつとんきょうな声を張り上げ、右手で口に運ぼうとしていたコーヒークップを取り落としそうになる。慌ててそれを両手で支え、今度は落とさないように怖々と傍らへ置いてから立ち上がると、いじけたように床に座り込んでいる貴樹の方へと足早に近づいてきた。貴樹を見下ろしてじろじろと眺めやってから、こういう意味なのかはわからない溜め息をつく。

「そりゃあ、また、とんでもないことを言い出したな、貴樹。ライブ大好きで、スイッチ入ると周囲も見えなくなつて酸欠になるまで

走り回っちゃまうお前が、どこをどうしたらツアーに行きたくないと
か言い出すんだ？ 天変地異の前触れか？」

「……その言い方はひどい」

貴樹の控えめな抗議など、天宮は聞く耳を持っていない。

天宮にとっては、貴樹の戯言などただの我儘にしか過ぎない。それを
をいちいち聞いていたら、身がもたない。そうでなければ、過密ス
ケジュールの貴樹と共に動く総合プロデューサーなど、こなしてい
られないだろう。

「本気で言ってるのか？」

「……本気って言うか……そういう気分、ってだけ、だけど」

「気分は困るなあ。チケットは完売してるんだが？」

天宮の台詞は随分と空々しい。何を考えているのか、その表情か
らはわかりづらかった。

「……で、理由は？」

「好きな人が、できて」

「うん？ それで？」

にこにことして続きを促しながらも、その実、天宮の目は全く笑
っていない。

とんでもないことを言い出した貴樹を警戒しているのは、明らか
だ。とは言え、天宮のことだ。ついでに、貴樹のその理由を聞いて
からかう材料にしようとしているのも、想像の範囲内である。

「ツアーとか行っちゃったら、会えなくなるかなーって……思っ
てそれで……その、嫌かなーとか……」

歯切れ悪くばそぼそと言いつく貴樹に、天宮は目をまるくし
た。

「そんなの、仕方ないだろ。それがお前の仕事なんだから。そう言
ってわかってくれないような彼女との付き合いは、俺はお勧めし
ないね。そんな程度で別れるだの何だのという騒動になるんだつた
ら、最初からやめとけての。大体、お前、前の彼女で懲りたんじ
ゃないのかよ？」

「いや、その……えっと、知らない、から」

「は？ 知らないって、何を」

「だから……その、俺がテレビに出てたりとか、REAL MODEの東城貴樹だとか、そういうの……全然、知らない人で。たぶん、俺のことはフリーターか何かだと思ってるんじゃないかなあ」

天宮は一瞬絶句し、それから、感心したようにつぶやいた。

「そういう奇特な人種って、いるんだな」

「順平ちゃん、自分を基準に考えるのやめなよ。皆が皆、順平ちゃんみたいに家にいる時はテレビつけっぱなし、っていう生活をしてないと思うよ。俺だって、普段はテレビなんか見ないし。俺が見るのはアニメだけだし、うちの液晶はアニメとゲームしか映さないもん……」

「お前こそ、その基準はおかしいぞ。それから、もん、とか言うな。気持ち悪い」

天宮の突っ込みをスルーして、貴樹はぼんやりと先を続けた。

「こういう仕事してるから、別にテレビを見なくたってある程度のことはわかってるけど、考えてみたら、テレビを見なくても平気で生活している人間って結構いると思うよ。俺だって、自分が関わっていなきやろくに知らないって言えるし。だってさ、考えてみてよ、順平ちゃん。俺がテレビに出る時って、REAL MODEの……って形容詞がつくわけでしょ。興味がなければ、俺の名前なんか覚えてないと思うんだよね。REAL MODEっていう名前を知っているかもしれないけど、ただそれだけだ。興味が無い人にとっては、REAL MODEがバンドじゃなくて製作集団の総称で、実質的に表に出ているのは俺だけしかない、他のメンバーはほぼ裏方に徹しているんだってこと、どうだっていいことでしょ？」

「まあ、それは確かにそうなんだが」

と、天宮は溜め息をつく。

「別に、テレビじゃなくなたって、お前の露出はそこかしこにあるだろうが」

雑誌だとか、CMだとか。

それでも、知らない人は知らないでいられるのだということを、貴樹は彩と会って初めて実感した。きっと、興味がないから、見ていたとしても記憶には残っていないのだろう。そういうこともあるのだと、言われてみればわからなくもなかった。

自分だって、好きなアニメの声優が誰なのかは把握していても、CMに出ているタレントが誰だということまではきちんと把握していないのだから。

「んー、でも、俺、自分がそうだからわかるけど、興味がないってことは記憶に残らないってことなんだと思う。あの人は、テレビとか全然見ないみたいだし、すぐくまじめな人みたいだから、俺みたいなちゃらちゃらした外見のオトコなんか、テレビで見たとしても記憶からデリートされてるんじゃないかなあ」

「……で？」

「で、って何？」

「どうして、そういう相手と知り合うようなことがあったわけ？」

「えーと、そのう……」

そもそも、最初から相談をもちかける相手が間違っている。

しかし、誰に相談することもできず、考えすぎてもはや思考回路が纏まっていけない貴樹は、最も警戒するべき人物の一人に話をして、いることに気づいていない。天宮に話せば最後、メンバー内に全てをばらされて吊るし上げの対象にされかねないことくらい、経験でわかりそうなもののな。

それは、貴樹が無意識に天宮を信頼していると捉えられなくもなかったが、そうではなかった。

貴樹には、相談しているつもりはまるでなかった。ただ、もやもやと抱えている気持ちを吐き出したかった、それだけだった。

もつれてしまっている、思考の糸。それを解す手がかりを見つけるために、ただ、とりとめもなくこのことを喋っていたい。そんな心境だったのだ。

「その気持ちはわからなくてもいいけど、それで、お前はもうどうしたいんだ」

貴樹が一通り喋るのを聞き終えた天宮は、呆れたように口を挟む。

「どうしたいって……え？」

「ツアー、中止にしたいのか？　そこまで責任感のないことを言い出すつもりか？　それとも、その彼女と別れたかったのか？　お前の話は支離滅裂だが、話を聞いている限りはその二択しかないだろ」

「そういうわけじゃ……ない。大体、そんなの、選べるもんじゃないし」

「じゃあ、どうするんだ？」

「どうするって言われても……」

いや、そもそも、付き合ってもいなければ、好きだと言ってもいい。前提条件が全然違うのだが、そこまで言う必要はない。

「今、貴樹が言っているのは、そういう二択をしなきゃならない、っていうふうに聞こえるぞ。選びたくないなら、そういう極論に走る必要はないだろ」

「だって……」

「だって、じゃねえだろ。別に、俺はお前がどんな彼女を作ろうと、それが常識の範囲内なら止めるつもりはないね。俺はお前が簡単に今の自分を放り出すような小さい器の奴だとは思ってないし、そういうお前について来れないような女なら、正直言って、今のお前には不要だとは思ってる。ただな、俺はREAL MODEのプロデューサーだから、お前も含めた全員で作りを上げた？　東城貴樹？　っていう偶像を壊すつもりなら、それは、全力で止める」

「……」

貴樹は答えられずに、天宮から視線をそらす。

「今、お前にとって一番大切なものは何だ？　目の前にあるツアーじゃないのか。それを成功させるために、お前はどれだけ努力をしてきた？　お前が今やるべきことは、ツアーをこなすことだろ。それ以外のことは、何かが起きてから考えろ」

「順平ちゃん……」

「何だ、答えられないのか？ まさか、前の彼女みたいに捨てられたらどうしよう、とか、そんな純情一直線なことでも考えているわけか？」

凶星を指され、貴樹はぐつと言葉に詰まっテうつむいた。

自分で純情なのかどうかなんてことは、考えたことはない。だが、その一件が貴樹の中で尾を引いていることは事実で、それは天宮も知っている。

以前に、付き合っていた恋人。こうしてデビューする前からの付き合いで、ひとつ年下だった。彼女となら、もしかしたら、いずれは結婚するのもかもしれないと、当時はぼんやりながらも考えていたけれど。

思いがけずデビューのチャンスに恵まれて、それが上手く軌道に乗ってREAL MODEの知名度が高まるにつれて、彼女といられる時間は必然的に減って行った。自分の想いとは逆に、彼女との距離は加速的に離れて行った。そして、それはREAL MODEとしてもとても大事な時期で、貴樹には私生活を省みてどうにかする余裕はないも同然だった。

そして、彼女は出て行った。一言も言わず、手紙すら残さずに。ツアーで地方に出かけて家に帰ると、部屋の中には誰もいなかった。数年間共に暮らして、築き上げてきたはずの彼女との居場所は、何もない寒々しい空間に変わっていた。

郵送されて来た、見覚えのある彼女の文字で宛名の書かれた封筒。そこに入っていた部屋の鍵。ただ、それだけのさよなら。

彼女のことを、好きだった。会えない時間があっても、それまでに積み重ねたものが何とかしてくれると、そう思っていた。それが間違っていることに気づいたのは、彼女が出て行って一人ぼっちになってからだっただけだ。

後になって、共通の友人から彼女の言葉を聞いた。

彼女は、REAL MODEの貴樹には用はない、そう言ってい

たと。

歌っている貴樹が好きなのだと、だからよかったねと、デビューを喜んでくれた。最初はあまりうまく行かなかったけれど、ふとしたきっかけで売れたことを喜んでくれたのは、仕事が増えるたびにはしゃいでくれたのは、全てが嘘だったのかもしれないと思い知らされた。たとえ、その時には本当の気持ちだったのだとしても、冷めてしまえばそれだけの残酷な言葉を吐けるのだと、そう思ってしまった。そして、何も知らない友人の無責任な伝言は貴樹を追い詰めた。

怖い。

思い出せば今でも切なくなるあの日の想いは、この瞬間にも心の奥に残っているのだから。

「……たぶん、順平ちゃんが思っているようなことは、違うと思うでも、俺は」

「でもな、貴樹。どっちにしたって、お前がREAL MODEの東城貴樹である以上、いずれは避けて通れないだろうが。先に事情を話しておけば、必要以上にこじれることもなくなる。ツアーに出なきゃならないのは、この先だって同じなんだぞ。全部話して、それでも別れるだの何だのという話になるんだったら、そんな女はやめとけ。お前にはふさわしくない」

「でもさ……順平ちゃん」

「何だ」

「今の順平ちゃんの話は、ひとつ、間違えてる」

「はあ？」

何が間違いだ、と、天宮は貴樹を睨む。

「実を言うと……その、まだ、付き合ってもいないんだよね……」

「……お前は、中学生か何かか……？ ツアーに行きたくないだの何だのって騒ぐ前に、やるべきことがあるだろう！」

とっとと告白して来い、悩むのはそれから充分だ！ と、天宮は貴樹の背中に容赦のない蹴りを入れた。

「……言われなくてもわかってます……」

そして、貴樹の『恋の話』は。

当然のことながら、その日のうちに天宮によってメンバー全員に面白おかしく語られることとなった。やはり、話す相手を間違っていたとは思えない貴樹の行動であった。

それからしばらくの間、貴樹はめまぐるしいスケジュールをこなすのに必死で、落ち着いてメールを書く暇もなかった。ツアーのリハーサルは佳境を迎えていたし、その合間を縫っての雑誌のインタビューや撮影、ラジオやテレビの出演やコメント収録、ファンクラブの会報に載せるメッセージの執筆。いろいろありすぎて、もう、何が無だかわからない。マネージャーに言われるがまま、貴樹は黙々と機械的にそれをこなして行くだけだ。

たまに、ぽっかりと時間が空く。それは、数時間とか、その程度のものだ。数日に一度、それくらいの間隔で生じるその空白の時間は、普通に社会生活を送っているのだらう彩に連絡するには、とても、常識とは言えない時間帯だった。

そんな時間に連絡を取っても許されるのか、そこまでの自信はなかった。

仕方ないから、簡単にメールだけ送っておく。

会えないからこそ、以前よりも頻繁に交わすようになったメールは、少し悲しかった。却って彼女に会いたい気持ちが募ってしまった、それは、気持ちを解決するには遠い場所にあるものにしかならなかった。

話をしたい。そう思う。今はただ、それだけだ。それ以上のことを望むのは、まだ早いと思っていた。いや、望めるほどに彼女との距離は近くない。

彩の声を聞いて、他愛のない話をして、そして、自分は彼女と変わらないのだと感じたかった。だけど、そんな小さな願いさえも叶わない日々は続く。

そうして、苛々は募る。これでも、結構ポジティブに生きている方だと思っていたのに、そんなの、全然違っていたとは思えない。仕事に集中しなければならぬのはわかっていて、仕事が始まれば

ちゃんとそのことだけを考えられる。なのに。

ふとした瞬間に、思い出す。そして、溜め息をつく。その、繰り返しだった。

「はあゝ」

本日、何度目かもわからない貴樹の盛大な溜め息。慣れてしまっただけの本来の自分とのギャップに、久しぶりに戸惑いを感じる一瞬。

その溜め息を聞きとめた天宮が、変な顔をした。貴樹がそうやって憂鬱そうな溜め息をつくのは、この頃では珍しいからだろう。

「何だ、その辛気臭い溜め息は」

「だってさあ」

「鬱陶しいから寄るな」

「冷たいなあ、順平ちゃんは」

「気持ちの悪い猫なで声を出すな」

「……ひどい」

「全く……お前は子供か」

呆れたように笑いを含んで言って、天宮は貴樹の分もコーヒーを淹れて持って来てくれた。どうやら、少しは気を使ってくれているらしい。

「どうせ、どうにもならないことでうだうだ悩んでいるんだろう。ストレスでもたまってるのか？」

スタジオの隅にうずくまり、誰かが持って来たイルカの抱き枕を胸に抱え込んでいる貴樹を見下ろして、天宮は言う。差し出されたカップを受け取ると、貴樹は口を尖らせた。

「子供とか言うな」

「だって、そうだろ。その態度がお子さまだったの。お前、ひよつとして、相当ストレス溜め込んでるのか」

「ストレスって……俺の、何が」

「言いたいことも言えなくて、自分の中でいろんなことがぐちゃぐちゃになって混乱してるって顔だ。ま、俺もね、実を言うと、あれ

はやり過ぎだっと思っている方なんだけどね」

「……へ？」

「あー、俺がこんなことを考えているってのは、栗ちゃんにはナイショな？ 栗ちゃん、言ってることは厳しいけど、基本的にはお前のこと一番に考えているわけだし、彼女の言い分が間違っているってわけじゃないのは俺も知ってるからさ。いや、これは結構前から思ってたんだけど、貴樹、かなり発言を制限されてるだろ？ ラジオとか、インタビューでさ。地を出すなって。それを傍から見ると、結構きつそうだなって思うわけよ。栗ちゃんの言うことは俺も正しいと思うし、東城貴樹がアニオタだったのは、確かにイメージとしてはどうよってのは事実なんだよな。でも、やりすぎはよくないって思う部分もある。貴樹はさ、その……あれだろ？ ラジオとかで、想いっきり喋ってみたいとか、そういう願望はあるんだろ？」

「……うーん、って言うか、別にそれはもうどうでもいいよ。慣れちゃったし、今更かな。今、ぐちゃぐちゃ考えているのは、全然別のことだし。順平ちゃんがそうやって思ってくれるのは嬉しいんだけど。あ、でも、発言制限にストレスがないってのは、それは嘘だけださ。どっかで息抜きしたいって、そりゃ、思うよ。でもさ、順平ちゃんは実際どう思う？」

「何が？」

「俺がアニオタだったら、何か不都合がある？ イメージがどうのってのは置いておいて、だけど」

「何だ、いきなり……。どうでもいいんじゃないかったのか？」

「そう言いながら苦笑を浮かべ、天宮は言葉を継ぐ。

「んー、まあ、俺はアニメとか全然知らんし、貴樹がそういうの好きでもどうでもいいんだけどね。人の趣味は自由だし、それを好きだって言う貴樹をおかしいっていう人間の方が心が狭いと思うね」

「だけど、栗ちゃんは……」

「REAL MODEの東城貴樹のイメージとしてどうか、って話になると、そりゃまあ、イメージ総崩れだろうな。誰だって、憧れ

のミュージシャンがエロゲープレイしてるのなんか想像したくねえだろ。マニアックな趣味をお持ちなら別だけどさ。でも、アニメとかエロゲーとか好きな部分も全部ひっくりくるめて、それが東城貴樹だったのも事実だと思うわけだ。栗ちゃんの言うことは正しい。が、正しいことが素晴らしいとは限らない。まあ、お前に勇気があるなら、押し切っちゃうのもひとつの手じゃないのか？　そういう事実をばらしたところで、減るファンってのは少ないと俺は考えてる。そんなのは貴樹の一面であって、アニメが好きだからってお前の歌の魅力が半減するわけでも何でもないからな。その程度のことです離れて行くようなファンってのは、元々、そんなにお前の歌に思い入れなんかないんだよ。離れる口実に使うだけだね」

「順平ちゃん、大胆なこと言うなあ……」

「ま、これは、俺個人の意見だけだね。言っておくが、これは、REAL MODEの東城貴樹という商品ブランドとしてのお前を壊してもいいって意味じゃないからな。その程度のことでは、壊れやしないと俺は思っているだけのことだ。ツアーを中止にしたいの何だのと寝言をほざくよりは、よっぽど可愛いね。生放送のラジオとか、取り返しのつかない場所で言っちゃうのも、ありだと思うぞ。ブースの外で、栗ちゃんが卒倒するかもしれないがな」

別に、そんな天宮の言葉がきっかけとなったわけではなかった。

おそらく、たまたま、だったのだらうと思う。

ラジオで読んだメールが、貴樹にとって何とも腹立たしい内容だったのは、偶然の為せる結果だ。

内容としては、他愛もない相談メールだった。そういうコーナーがあるから、リスナーからの相談事を面白おかしく読み上げて、それに対しての対処を貴樹が喋る。割りと人気のコーナーだ。恋愛相談も多く、その時に読んだメールもそういう内容だった。

話題は、付き合っている恋人のこと。

付き合っている恋人はアニメが好きで、この頃は深夜アニメの『スィートキューティ』にはまっている。くだらないアニメを見た挙

げ句にそのキャラを可愛いと褒めるなんて許せない、こんな気持ちの悪いオタクをどうにかする方法はありませんか、というものだった。

誰が選んだメールなのかは知らない。貴樹に嫌がらせをする目的で、スタッフの誰かが紛れ込ませたというわけでもないだろう。いつもは自分でチェックしてから生放送に入るのに、その日に限って全てがギリギリで、本番前に自分でチェックすることもできなかったのも大きな原因だ。

それでも、貴樹が勢い余って爆弾発言をしてしまうには、要素としては充分だった。

そのメールを読んでいるうちに、貴樹の中で何かがぷちっと切れた。

大好きなアニメを貶められている言葉も、いつもなら笑って流せるはずの気持ち悪いオタクという形容詞も、その時は何故だか許せなかった。

彩と会えないことも、好きなものを好きと言えないことも、デートをしたくたって誰かに見られることを常に警戒しなければならぬということも、誰が悪いわけでもない。自分で選んだ仕事の結果だ。だから、今まではそれを受け入れてきたし、それでもいいと思ってきた。不満に思うことはあっても、東城貴樹というのは存在そのものが商品なのだから、という言葉を支えにしてきた。そもそも、そんなことを考えるくらいだったら、最初からこの道を選んだりはいはずだ。

なのに、細い糸のように張り詰めていた何かが、その瞬間に限界に達したことだけは確かだった。

「……これってさあ、あれだよ。すごい勝手」

考える間もなく、すらすらと言葉が出てきた。

「俺はさ、この彼氏の方に味方しちゃうんだけどなー。だって、趣味だもん。別に、それで彼女をおろそかにしたわけじゃないんですよ？ だったら、それでいいじゃん。一人の時間に何を見てようが

勝手だろっての。それとも、一人の部屋で何をしているか、逐一彼女に報告しなきゃならないわけ？ 彼女のことしか考えちゃいけないの？ 趣味の時間はどこよ？ アニメが好きで何が悪い。アニオタはキモイ、変、そう言いたいわけだよね、この人は。違うの？ そういう男は嫌いってことなんでしょ？ もし、そうなんだとしたら、この人は俺のことも嫌いだよね。だって、俺、この人の言うところのキモイアニオタだよ。この人の彼氏の言うスイートキューティ、全話DVD持ってますよ、初回盤ですよ。当然でしょ」

そして、思わず付け加えた。

「あすかさんは俺の嫁。これだけは譲れないね」

ブースの外では、皆が啞然としてこちらを見ていた。

「お前、バカじゃないのか？」

頭に血が上ってしまったの言動だったとは言え、自分で引き起こしてしまった事態に、貴樹は地の底まで落ち込んでいた。軽はずみな発言がこんな事態を引き起こすなんて、思ってもみなかったのである。

それは、目に見えてファンが減ったとか、抗議の手紙や電話が殺到して対処に追われたとか、そういう類のものではない。あの放送以降、連日のように事務所へと届けられるプレゼント攻撃に眩暈がしていたのである。

その状況を見たマネージャーの栗原は、呆れてバカだと言いつつ。諸悪の根源と言っても過言ではない天宮までもが、そんな態度だ。それを聞いた貴樹としては、そのまま地の果てまで逃亡してしまいたいような強迫観念に駆られてたまらない。

「……なんつーか、貴樹のファンってスゴイのな。あれ聞いてドン引きするかと思いきや、そうじゃないってのがすごい」

「……もう言わないで」

天宮の言葉に力なく答え、貴樹は溜め息をついた。

目の前に積まれた大小様々な封筒の類に、貴樹はまたしても滅入ってくる。大好きなものであるだけに全て持っているわけで、今更送られてきたって困る。これほどまでに送りつけられたら、溜め息のひとつやふたつはつきたくなるというものだ。

もちろん、心配していた抗議がひとつもなかったとは言わない。

だが、聞いていたリスナーからの反応は概ね好意的なもので、ファンはファンで新しい一面が見られたといっってこうしてプレゼント攻撃が始まり、それまでは東城貴樹という存在にさほど興味を持たなかった層がそれなりに増えたらしい。それは、ラジオに送られてくるメールの内容に顕著に現れていると聞いた。何故か、男性からの好意的なメールが圧倒的に増えたらしい。貴樹のオタク暴露は、新規ファンの獲得には大いに役立ったとでも言うべきか。

喜べばいいのか、それとも。

天宮はにやにやしながらそのプレゼントを眺めやり、次いで、貴樹へと視線を向けた。

この件が起きて以降、天宮はずっと笑い続けている気がしてならない。所詮他人事で面白がられているのだろう。

「で、貴樹はどうなのよ？」

「どうって、何が」

「俺の言った通りだろ。お前がアニオタだろうが何だろうが、お前の歌の魅力は変わらないって。もしかしたら、アニメのOPのタイアップとかも取れるかもしれないぞ」

「何か、自分の手柄みたいな顔をしないでくれる!？」

そもそもの諸悪の根源は、この天宮のような気もしないでもない言ったところで、のらりくらりとかわされてしまいうだろうけれど。

貴樹は溜め息を吐き出して机に突っ伏して、それから、時計を見た。午後六時半。そろそろ帰りたい。

「ねえ、帰っていい？」

今日の予定は、明日から始まるツアーに関しての事務所での最終打ち合わせで、そのついでにこのプレゼントの山を見せられたのだ。打ち合わせはとくに終わっているし、もう何もないのなら早く帰りたい。

情けない声を上げた貴樹に、栗原は溜め息をつく。

「仕方ないわね。帰ってもいいけど、今日はちゃんと早く寝なさいよ。アニメとか見ないで」

「はい」

「明日からツアー初日なんだってこと、わかってる!？」

「わかってますよう」

マネージャーにそれ以上ごちゃごちゃと言われないうちに、と、貴樹はそそくさと荷物を纏め、事務所を出た。早く帰ったところで何か予定があるわけでもないが、自分の失態の結果であるあの山を見ているのも何だか嫌だったのだ。

明日からツアーが始まる。

ツアーが始まってしまえば、今まで以上に自由な時間は少なくなってしまう。さっさと帰ろうと思ったのは、それもあった。そして、一番の理由は、彩だった。

今日を逃せば、おそらく、次に纏まった時間が取れる日は随分と先になる。そう思ったからだ。何しろ、ツアーの日程はありえないほどに詰まっっていて、東京にいること自体がほとんどなくなってしまうようなスケジュールなのである。

その前に、彩に会いたかった。会って、伝えたいことがあった。

貴樹は少し考えた後、彩の家に行くことに決める。何か手土産を持って行かないと、と考えて、事務所の近くにあるマネージャーお気に入りのケーキ屋でケーキを買った。一緒に食事をした時にケーキも食べていたから、彩がケーキを嫌いというわけではないはずだ。それでも、何を好むかがわからなくて、そこにある種類をひとつずつ全部下さいと言ったら結構な大荷物になった。

さすがにそれを持っては帰宅ラッシュ時の電車に乗れないし、大

体、最近は見つかるのが怖くて電車に乗ること自体がほとんどない。今日は車で来ていないから、仕方なくタクシーを拾った。

彩の住んでいるアパートの近くでタクシーを降りて、それから、深呼吸をひとつ。

メールを介して何度もやり取りはしているし、電話だってした。けれど、実際に会うのはまだ三度目という事実には愕然とする。

会った回数なんて、もう関係ないと思っていた。好きになってしまったのは、思い返せば、たぶん、最初からなのだから。

貴樹は何度となくインターフォンを押そうとして躊躇い、そのたびに指を引っ込める。そんなことを何回か繰り返しているうちに、通りがかった住人と思しき相手に見咎められそうになった。……よく考えてみれば、貴樹のような男が、一抱えもあるでっかい箱を抱えてアパートの廊下に立っていたりしたら、立派に不審者だ。

その視線を振り切るように、慌てて指先を押し込んだ。

「……はい？」

わずかな時間において機械越しに聞こえた彩の応答に、どきりとする。心臓が跳ね上がって、口から飛び出してきそうなほどに緊張した。

「あ、あの……っ」

頭の中ではちゃんというろろ考えていたはずなのに、いざとなると思考がまっしろになってしまったただの不審者だ

「とっ、突然すみません！ 東城です」

「……どうかしたの？」

「えっと、その、お話が！ ありまして！」

貴樹がつつかえながら力んでそう言うのと、いきなり相手は沈黙した。

何か機嫌を損ねるような、まずいことでも言ったのだろうか、と、自分の発言を思い返して貴樹がうろたえていると、不意にドアが開いた。

「東城くん……いきなり、どうしたんですか」

顔を出して不思議そうに問いかけた彩に、持っていたケーキの箱を押し付けるように差し出した。

「え？ な、何？」

頭の中はまっしろのまま、さっきからずっと繰り返してきた言葉だけが無意識に滑り出す。

「三枝彩さん、俺と、付き合って下さい……!!」

「……どこに？」

きょとんとして、彩は聞き返した。

腕に抱えた大きな箱から漂う甘い香りも手伝って、それはとても可愛らしく見えたけれど、その言葉はとくに振り切れていた貴樹の思考をストップさせるには充分すぎるほどの威力を持っていた。

どうして、そんなお約束なボケをかますのだろう、と、貴樹は何だか切ない気分にも襲われる。

「え……っ、あの、そういう意味じゃないんだけど……」

「えーと……その、それは」

「……俺と、お付き合いして欲しい、ってこと。……その、こ、恋人として」

「ふうん、そう」

最初はボケで、今度はあっさり流された。しかも、全く答えになっていない。

「そ、それって、どっち……？」

恐る恐る聞き返せば、彩はぱちぱちと瞬きをして、小さく首を傾げた。

「……そうね、別に東城くんことは嫌いじゃないし、考えてもいいかな」

「本当に!？」

「私は嘘が嫌いだから」

そう無然として言い放った彩を、思いきり抱きしめようとして自分が持つて来た箱に阻まれた。恨めしげにその箱を見ていると、彩はその箱と貴樹の顔とを見比べ、くすりと笑う

彩の反応を見る限り、正直、貴樹の気持ちがちやんと伝わっているかどうかは怪しいものではあったが、そんなもの、後から何ともなる。最終的に、わからせてしまえばいいのだ。

貴樹が、本気で彩を好きだということを。

「……ところで」

と、感動も何もなく、彩が箱を持ち上げた。

「え」

「この、場違いなほどに大きな箱は何？」

「ええと……ケーキ……なんだけど……」

「こんなに要らないんだけどなあ」

そう苦笑しながら、彩は一抱えくらいありそうなケーキの箱を抱えたままで溜め息をついた。それは苦笑に近いもので、決して貴樹を拒んでのものではないことがその態度で何となくわかった。それがわかってしまえば、何もかもがどうしてもよくなってしまいうくらいに嬉しくなってしまったのだった。

(……どうしよう)

彩は貴樹が置いていったケーキの箱を前に、固まっていた。いきなり、告白された。

嬉しかったけれど、驚いた。そういう展開を期待したりしなかったと言えば、それは嘘になる。だが、こんな坂道を転がり落ちるかのような急展開など期待していない。何より、もう少しゆっくり進んでいけばいいのに、と思っていたことが全て吹っ飛んでしまった。大体、大輔に描いてもらったラフ画だって、まだ渡せていないというのに。

あまりのことに、とぼけた返答をしてしまったことを思い出すと、何だか地の底まで埋まってしまいたくなる。

彩は溜め息をつく、目の前の箱を恨めしげに眺めた。

明日は仕事が早いからこれで、と言って、貴樹はすぐに帰ってしまった。せっかくお茶を淹れたのに、ほとんど手付かずだ。持ってきたケーキの箱は、開けられてもいない。開ける隙もなく、彼はあたたふたと帰ってしまったからだ。

滞在時間は一時間にも満たなかった。

まるで、あの言葉だけを言いに来たかのようなその振る舞いに、尚更、どうしたらいいかわからない。

しばらく仕事で忙しいと言い残していたから、彼としてはその前にというつもりだったのかもしれない、と思う。だけど、だからって、あれはないと言いたくなるのは我儘だろうか。何だかケーキを渡しに来たついでのような言い方にしか思えない。

貴樹にとってはケーキこそがついでだったのだが、そんなことまでは彩には伝わらない。

彩はしばらく考えていたが、思いついたように携帯を取り上げた。時間は遅めだが、どうせ、不規則な生活をしている相手だ。別にか

まわらないだろう。

いつものように幼馴染の番号を呼び出すと、ワンコールで出た。よっぽど暇なのか。

「大輔、今、暇？」

「暇じゃないが逃亡したい」

「何それ」

「ちよつと煮詰まっついていてなあ……。で、何の用？」

「煮詰まってるなら、甘いものでも食べに来ない？」

「……ふうむ、彩もいろいろとあるんですね？」

どうやら、大輔は面白がっているらしい。最初に話してしまったがゆえに、だろうか。彩が何かを話したいのを察して、からかうような口ぶりで先を促した。

「告白されたの」

「オタクにか」

「オタクって……」

「んじゃ、あすかたんは嫁男」

「それじゃもっとひどい」

「……オタクのくせにリア充か」

大輔はひとしきりぶつぶつ言っていたが、すぐに行くと言って電話を切った。

大輔が住んでいるのは、彩のアパートのある駅からふたつほど離れた駅が最寄り駅になる。別に示し合わせたわけでもないのだが、最初からその立地だ。そのせいで、実家を離れてもお互いに行き来するのは変わらない。

いっそくつつけばいいのに、と母親から言われたこともあったが、彩にとって大輔は兄のようなものだったし、大輔にとっては妹とさして変わらない。家族のような相手にそんな色めいたものを期待されても困る。大体、もし、そうだったとしたら、こんなふうに頻繁に入り浸っていたら逆にまずかろうとも思うのだ。

三十分と経たないうちに、大輔がやって来た。時間が時間なだけ

に、電車ではなくバイクで来たらしい。

いつものように上がり込んだ大輔は、テーブルの上に鎮座したままのケーキの箱に目を丸くした。

「何コレ」

「持って来た」

「オタクが？」

「いつまでオタク呼ばわりなのよ。まあ、その通りなんだけど。あー、大輔、どれ食べる？」

実は結構甘い物好きの大輔は、さっさと自分で箱を開けて吟味している。取り分けるためにお皿を渡すと、やけに真剣に悩んでいた。「いくつ食っていい？」

「別に、好きなだけ食べていいよ。欲しければ持って帰って。いくら何でも、私一人じゃ食べきれないから」

「おお、マジで？ 彩はいいヤツだ。ついでにオタクもいいヤツだ。さすが俺のあすかを嫁認定するだけある」

本気なんだか冗談なんだか、大輔は上機嫌だ。

二人でケーキを突付きながら、いろいろと話をした。話題は主に貴樹のことで、最初は適当に聞き流していた大輔も、謎めいたオタク青年という下りに「ネタになる」と目を輝かせた。それっぽいキヤラが彼の作品に登場するのも、時間の問題かもしれない。

「うん、俺はさ、そいつはそんなに悪いヤツじゃないと思うよ。基本的に、オタクって自分の興味のないことはどうでもいい人種だからね。そいつが彩に本気だから、そういう行動に出るんだろうし。」

まあ、オタクのくせにリア充は爆発しろって感じだが」

そう言って、大輔は三個目のケーキを胃に収めた。見ているだけで太りそうな食べっぷりだが、こんな食生活でも昔から体型がほとんど変わっていないのは羨ましい限りだ。

「告白されて、それで嫌じゃなかったんなら、付き合えばいいと思う。んで、ネタの提供もよろしく」

いろいろ煮詰まってたからちょうどよかったー、と、大輔は爽や

かな笑顔でのたまった。

そして、二人の思いを他所にREAL MODEの全国ツアーは始まってしまった。

今までの貴樹だったら、何も考えずに喜んでいたに違いない。ツアーは好きだ。ツアーと言うよりも、ライブという空間が好きなのだ。それに、あちこちに行って美味しいものが食べられるのは素直に嬉しい。

初日から、大阪2DAYS。そこから移動日を一日挟んで、四国四県を回って、一度東京に戻る。それから、東京近郊で一日か二日おきに数公演。初日の大阪から九連泊の強行スケジュールの上、その次もほとんど休む暇がない。しかも、一公演につき二時間半のライブを全力でこなすのである。

駅や空港に見送りに来るファンには、嫌な思いをさせたくない。できるだけ笑顔を見せたい。そう思っても、そのうち引きつって来そうだなと鏡を見ながら思う。

始まる前は何かかなるような気がしていたけれど、それは、随分と甘い考えだったのかもしれない。彩に会う時間を取るどころか、電話もメールもろくにできないだなんて、ありえない。まだツアーは始まったばかりだし、ある程度の余力はあるつもりだったけれど、徐々に蓄積されていくものがあることは否めない。毎日のようにこなすライブが、精神的・肉体的に全くダメージを与えていないとは言いきれなかった。

せつかく付き合ってもらえることになったというのに、これでは、意味がない。

「……甘かったなあ」

はああ、と、大きなため息をひとつ。

移動した先の、ホテルの部屋だ。シャワーを浴びてから、ベッドに転がって天井をぼんやりと見上げる。まだ、今日のライブでの余韻が抜け切らない身体は、シャワーの熱とは違う熱さで火照っている気がした。

貴樹は、ライブという空間が大好きだった。今でこそホールクラスの大きな会場でしか公演できないが、最初は小さなライブハウスから始まった。その時から、自分が歌っているその場でダイレクトに反応が返って来る瞬間は、何よりも興奮していた。あの瞬間のために、自分は歌っている。そんな気がするほどに。

もう少し落ち着いてから、彩にメールを書こう。そう思いながら、ベッドサイドのテーブルに放り出してあった携帯を取り上げる。

受信フォルダを開くと、彩からのメールがある。夕方に届いていたもので、ステージが始まる前に既に内容は読んでいたけれど、またそれを開いて読んでしまう。

彩からのメールだというだけで、何となく嬉しいのだ。たとえば、その内容が他愛のないもので、今日の献立などがずらずら書いてあるものであったとしても、だ。

彩は、料理も好きらしい。食べたいなーとメールをしたら、今度食べさせてくれると約束してくれた。その日が待ち遠しくてならないと更にメールをしたら、今日の献立はこれです、なんて返ってきたのだ。

彩からのメールが、当たり前前に来ること。それが、とても幸せで、嬉しかった。

結局、彩には、本当のことを言えないままだった。貴樹がしばらく留守にすると言うと、彩は不思議そうな顔をしていた。仕事で地方に行くのだとだけ言ってみたが、それ以上突っ込んで聞いてこなかった。突っ込まれたとしても、その先の言い訳を用意していないから、しどろもどろになってしまったかもしれないけれど。たぶん、その場はそれで納得したのだろう。

だが、そんな理由もない留守が長く続けば、不審に思われること

は間違いない。この状況は、半年続くのだ。かと言って、本当のことを告げる勇気も、まだ持てずにいた。

それはまだ、少しだけ怖くて覗くことのできない未知の領域だった。

9 (後書き)

だいぶ久々になりました。

次はもう少し早くできるといいな、と思っています。

今回のツアーは、初めて挑戦する全県ツアーだ。今までは地方でも大都市だけを対象にしていたのだが、ファンからの要望と現在の状況などを考え合わせた上で実現したものだ。全ての都道府県を回り、主要都市では2 DAYS、もしくは3 DAYSのライブを行う、全部で五十八本の大規模ツアーである。

それを、わずか半年という短い期間でこなすのだ。その精神的・体力的な負担は、並大抵のものではなかった。それでも、貴樹にはそれだけのものをやり遂げようとする気概があったし、できると思えるだけの自信もあった。デビューしてから今まで、培ってきたものは無駄ではないと信じているからだ。

彩と付き合い始めて、三ヶ月。

ちょうどツアーは折り返し of 時期に差し掛かっていた。地方を回ってきて、東京2 DAYSを一区切りにして二週間ほど間が空く。ぎゅぐゅと詰め込まれたスケジュールはその後にもまだまだ続くのだが、ようやく先が見えてきた。そんな気がする時期である。

もちろん、東京に戻ったからと言って仕事がないわけではないし、わずかな時間は細かな仕事で埋め尽くされていると言っても、間違いない。

それでも、自宅に戻ってくるのができるのは息を抜くことができる時間を持つることにつながる。そして、そんな忙しいスケジュールの合間をどうにかやりくりして、貴樹は彩と合う時間をひねり出す。ほんの少しでも、彼女と会って、彼女との時間を持ちたい。だから、無茶な調整だって気力でこなしただ。

そんな貴樹の涙ぐましい努力も手伝って、会えない時間が多いのとは逆に、彩との距離は縮まってきたようにも思える。

最初の答えが頼りなかったとは言え、付き合い始めて三ヶ月は経つのだ。普通であれば、多少は進展が見られなければおかしいとい

うものだ。

時間が空いた時には、貴樹は、大抵彩の部屋へ上がり込んで入り浸っていた。その方がお互いに都合もよかったからだ。自分の部屋に、彩を呼ぶ勇氣はない。知られたくないものが山のように積まれているそこに、彩を連れて行く気にはなれなかった。別に、オタクだというのは最初から知られているし、そんなものが見られたってどうでもいい。エロゲーとアニメDVDの山も、アイドル声優のポスターも、所狭しと並べたフィギュアも、ミサカダイスケ書き下ろし限定品の抱き枕が見られても全然平気だ。

見られたくないのは、REAL MODEの東城貴樹というオフイシャルの部分。いつかは、と思っているけれど、今はその勇氣が持てないはまだ。

今日の仕事は午前中の撮影だけで、栗原からお昼には帰っていいと言われた。即座に彩にメールを打つと、仕事があるから今は無理だけど、それでもいいなら上がって待っていてもかまわないと返事が返ってきた。

貴樹が訪ねた時には、やはり彩はまだ戻っていなかった。それは最初からわかっていたし、合鍵は少し前に預けられていたから、彩に言われた通りに中に入ってごろごろしていた。

帰って来た彩は、スーパールの袋を下げていた。どうやら、買い物もしてきたらしい。

キッチンでお茶を入れているらしい彩の背に向かって、さっきからどう言えいいのか考えていた言葉をかけた。

「……あのさ、また、留守にするんだ。明日から。10時くらいの飛行機だったと思うけど」

「どこへ？」

彩は驚いて振り返り、そう聞き返した。

「北海道。ってか、札幌。お土産買って来ようか？ 何がいい？」
「……うーん、北海道って言ったら、あれかなあ？」

少し考え込むように首を傾げてから、北海道士産の定番となって

いる有名なお菓子の名前を挙げて、彩は笑った。

「え、そんなのでいいの？ 他に何かない？ 北海道はお菓子美味しいし、いっぱい買って来るよ！？」

「別に……。でも、貴樹がお菓子買い込む姿って想像できないんだけど」

「そうかなあ……」

「仕事で行くんでしょう？ そんな、お土産なんか買う暇あるの？」

「んー、買う暇くらいはあるよ、たぶん」

おそらく、それくらいの時間はあるだろう、と、推測する。もし、自分では買えそうもなかったら、栗原を拝み倒して買ってきてもらえばいい。

本当なら、彩へのお土産は自分で選んで買いたい。けれど、貴樹が無防備に空港をうろうろしていたりすれば、周囲の迷惑になることもあるのだ。そのことを、貴樹は痛いほどに理解していた。

「俺、女の子の好きそうなお菓子はよく知らないけど、えっと、マネ……じゃなくて、仕事場の人に女の人もいるから！ だから、明日、聞いてみるよ。たぶん、そういうの買う気満々だと思うし、よくわかんなかったら一緒に買ってもらうから」

手近にあったでっかい黄色いぬいぐるみを引きずり寄せ、貴樹はそれをぎゅっと抱きしめて溜め息をつく。

「どうしたの、盛大な溜め息ついて」

「……んー、行きたくないなーって……」

「仕事なんでしょう？」

「そうだけどさ。だって、彩と会えないのは、寂しいじゃないか！ 帰って来られるのは来週だし、また、一週間も会えないのかと思うと……」

「何、子供みたいなことを言っているの。大体、そんなに各地を飛び回る仕事って、何をやっているの？」

「……えと、内緒」

何度も繰り返しているその言葉を口にすると、一瞬、彩は表情を

強張らせた。だが、すぐにそれを消して、くすりと笑う。

「……子供みたい」

「えー」

苦しい言い訳をしているな、と自分でも思いながら言葉を綴る。それを、彩が薄々ながらも疑っていることも、何となく気づいている。

貴樹のついた苦し紛れの嘘が、どこまで通用しているのかなんて、考えるのも怖かった。彩の傍からいなくなる理由を、必死で正当化しようとなない知恵を振り絞っているなんて、彩は考えていないのかもしれない。本当のことを知られたくないのは、ただの貴樹の我儘だからだ。

彩は、どこまで気づいていて、どこまで知らないのだろう。

そして、この嘘が全て知られてしまった時、彼女は、どんな反応を示すのだろう。

時々、その可能性を考える。

今の時間が幸せであればあるほど、それを失うことに怯えている自分がいる。どうしたらいいのかわからないままに、最初についてしまった嘘を取り繕うために更に嘘を重ねることは、心が痛い。自分の弱さと不甲斐なさに、情けなくなってくる。

貴樹が、REAL MODEのメイン・ヴォーカルであること。ツアーともなれば（いや、それに限ったことでもないのだが）、空港や駅で追っかけを引き連れて歩く羽目になるような、そういう存在であるということ。

その事実を、彩は受け入れてくれるのだろうか。

どれだけ考えても、答えは出てこなかった。

「ねえ、貴樹」

「……ん？」

「見送り、行こうか？ 10時くらいの飛行機なんでしょう？ だったら、明日は遅番だし、見送ってからでも会社には間に合うから」何気なく提案したのだろう彩の言葉に、貴樹は心の底から驚いて

その場で飛び上がりそうになった。思わず、抱えていたぬいぐるみを放り投げてしまうほどに。

「だ、駄目！　ぜつつつたい、駄目ー！！」

彩が空港まで来たりしたら、その場で全てがばれてしまうような気がした。栗原が黙って見ていてくれるとも思えないし、何より、空港には追っかけがいるはずだ（いないはずがない）。

そんな状況を見られてしまえば、どう好意的に考えても言い訳の余地がない。

「どうして駄目？」

強行に駄目だと言い張る貴樹を不審に思ったのか、彩は眉をひそめてこちらを見た。

それは、当然の疑問なのかもしれない。

彩と貴樹は付き合っていて（たぶん、思い込みじゃないはずだ）、その相手が地方に出張に行くという。そして、自分は時間が空いているから見送りに行きたい。当然の流れだ。

その会話の流れ自体は、決して不自然なことではない。その申し出を断る方が、よほど不自然だ。付き合い始めてすぐというのであればともかく、既に三ヶ月も付き合っているのだから、そうなるのも何もおかしくはない。だから、彩が断られたことに戸惑う気持ちは当然のものだった。

「……えっと、あの、その、そこにいるのは俺だけじゃないし……。し、仕事で一緒の人もあるから、その……は、恥ずかしい……」

それは、嘘では、ない。

天宮が見れば、後で盛大にからかわれるのは必至だから、そういう意味では嫌だ。栗原だって表面上は何も言わないだろうが、後でちくちくとお説教されるから嫌だ。あの連中と彩が顔を合わせるなんて、どう考えても貴樹にとって楽しい結果が待っているとは思えない。

けれど、貴樹が駄目だと思ってしまう根本的な理由とは、わずかに論点をずらしている。

それでも。

他の部分で彩についている嘘があることは、本当だ。

たくさんの嘘を、ほんの少しの真実で取り繕いながら、ちくりと胸を刺す痛みに気づかないふりをする。そんな自分への誤魔化しが、いつまで通用するかなんて、わからなかったけれど。

「……そっか。確かに、職場の人が一緒だと嫌だよな」

貴樹の苦し紛れの言い訳に、彩は納得してくれたいらしい。少なくとも、貴樹はその時点ではそう解釈した。彩の想いは、それとは全く別の場所にあったのだけれど。

その後、彩の手料理を食べながら話をして、貴樹は日付が変わる前には彩の自宅を後にした。明日から、また数日に渡って留守にしなければならぬのに、準備を何もしていなかったからだ。彩が何か言いたそうにそわそわしていたのには気づいたけれど、その内容が何であるかなんてことまでは気が回らなかった。

彩が、泊まってくれてらいいのに、と思っていたことに、貴樹は気づけなかった。

彩からそう言い出してくれたのなら、もしかしたら、何か変わっていたかもしれない。だが、そうはならなかった。彩は、貴樹には貴樹の事情があるのだと自分を納得させてしまい、それについて貴樹に問い質すことはしなかったからだ。

普段はどうでもいいことをべらべらと喋る貴樹が、頑なに口にしようにとしない？仕事？のことは、きつと、話題にしたいくないことなのだと彩は解釈していた。別に、怪しげな仕事をしているようなには思えなかったし、そんなことを無理に聞き出そうとも思わなかった。言ってくれなくても寂しくないとさえ言えば嘘になるけれど、貴樹が言いたくないのならそれでもいい、と思ってしまったのだ。

ただ、何となく気になった。だから、羽田空港まで行ってみようかな、と、彩は考えた。

飛行機の時間と目的地は聞いたのだから、こっそりと見に行くくらいなら大丈夫だろう。要は、向こうの関係者と顔を合わせなければ

ばいいのだ。確かに、仕事関係の人たちがいる場でプライベートな関係者と会うのは、気まずいのはわからないでもないからだ。

貴樹には内緒にされているが、彩は地味に気になっていた。それに、仕事に向かう貴樹というのがどうにも想像できなくて、一度見てみたい気がしたのだ。

彩の前で見せる貴樹というのは、仕事をしているというイメージからは程遠い。第一印象がひどかっただけに、その後のイメージが変わってきて、ちょっと馬鹿な大型犬のイメージは抜けきれない。おまけにオタクだし、何だかよくわからないイメージの方が強い。だから、そうではない貴樹を見てみたい気もするのだ。

「……よくわかんないけど、でも、それでいいって思う私が変わるかな……」

付き合っているというのに、どこか遠い。それは、もしかしたら貴樹も感じていることなのかもしれない。けれど、その遠さをどうにかするためにはどうすればいいのか、彩にはわからなかった。

彩が誰かと恋人として付き合ったのは、実を言うと貴樹が初めてだ。

だから、恋人同士というものがどうするべきか、今ひとつよくわからない。

そんな、足踏みをしているような関係から、一歩でも進みたい。

彩は、そう思っていたのだ。

10 (後書き)

彩の部屋にいでっかい黄色いくまは、はちみつ好きのアレで。

自宅まで迎えに来たマネージャーの栗原に伴われて、空港に着く。どうせ、既にファンが待ち構えているに違いない。

その相手をしなければならぬと思うだけで、寝不足の身には堪える現実だ。体調管理も仕事のうち、と、栗原が怒るから表立って口に出すことはしないが、眠れなかったことは事実だった。

いろいろなことを、考えすぎているのかもしれない。

眠った方がいいとわかってはいても、感情はそれで割り切れるものではない。貴樹が帰る間際に見せた、彩の何か言いたげな表情が、頭から離れない。

彩は、何を言いたかったのだろう。

彩が考えていることがよくわからないのはいつものことだけれど、昨日はいつも以上に考えてしまった。彼女の真意がわからなくて、眠れないほど悩んでしまって、気づいたら朝だったのだ。まさか、泊まって欲しいと想っていたなどとは夢にも思わないのは、貴樹も恋愛経験の少ない奥手の証拠だ。

「はあゝあ」

「何なの、あんたは！ 朝から不景気なでっかい溜め息ついて！

今日は、向こうに着いたらすぐにライブなんだからね」

栗原が不機嫌そうにたしなめるのを、笑って受け流す。

「わかってます。大丈夫。俺ライブ好きだもん」

「貴樹くん！」

待ち構えていた追っかけの子が、貴樹を目ざとく見つけて走り寄って来る。デビュー直後から貴樹を追っかけてきてくれている、貴樹も顔を覚えてしまっている古参の追っかけの一人だ。朝からご苦労様なこと、と他人事のように考えてしまう。

「おはようございます！」

「……はい、おはよう」

にっこりと笑って、差し出された手紙とプレゼントらしき小さな包みを受け取る。可愛らしくラッピングされたそれらは、彼女たちの気持ちだ。こうしてプレゼントをもらったり、手紙をくれたりすることは、素直に嬉しい。

天気の話や、流行の服のこと。女の子たちと当たり障りのない会話を交わして、他のメンバーが来るまでの時間をつぶす。

こうしてファンの子と喋るのも、相手が顔見知りにも近い昔からのファンだからだ。売れる前からの貴樹を知っている相手には、少しだけ警戒心も緩む。こうして貴樹のそばまで来て話すことができるのは、昔からのファンがほとんどだ。貴樹自身も彼女たちの名前や顔を把握しているし、これまでに変なことをされたこともない。彼女たちは懸命に貴樹の好みそうな話題を探して話しかけてくれるから、その努力はすごいなと感心してしまうくらいだ。

だが、放っておいて欲しい、と思うこともある。

興味がないこともないが、どうでもいいことを延々と話されても苛々するだけだ。

それに、貴樹のオタク暴露以降、アニメの話題を振って来るファンも増えた。付け焼刃の知識であれこれと喋られても、どう反応すればいいのかわからない。それは違々と突っ込みを入れたらいいのか、それとも、流すべきか。突っ込みを入れたら入れたで熱く語ってしまいそうな自分がいるし、間違っているのをそのままにしておくのも何となく嫌な気がする。

そうなると、聞き流すしかない。

(眠い……)

傍らでファンの子が喋っているのを半分以上聞き流し、貴樹はこみ上げてきそうになった欠伸を噛み殺す。貴樹が予定よりも早く着いてしまったために、来ていないメンバーがいるのだ。それを待っているから、ここから動けない。こんなことなら、もう少し車の中で寝ていればよかった。

「もう、貴樹くんってば、聞いてますか？」

「……え？　ごめん、何？」

「あのね、この前のライブで……」

いつの間にか、話は先日の方ライブの話に移行していたらしい。少し黙っていてくれないかな、と、内心では思う。

応援してくれるのはありがたいことだと思っているし、彼女たちがいなくては貴樹の仕事は成り立っていないと知っている。それでも、こうも近くでマシンガンのように喋られるのは、かなりウザイ。彼女は追っかけの中ではマナーのいい方で、貴樹も割と気に入っている子だ。いつもならそれほど鬱陶しいと思ったりはしない。

だが、その日の気分で嫌だと思いう時だって、ある。要するに、放っておいて欲しかったりするのだ。

「貴樹」

誰か助けてくれないかなーと、思っただけ視線を巡らせていると、少し離れた場所にいた天宮が貴樹に向かって手招きをした。

救いの神登場、と思った。呼ばれたのをいいことに、貴樹は「ごめん、呼ばれた」と軽く断りを入れて、そちらの方へといそいそと移動する。

「助かった、順平ちゃん。ありがたい」

追っかけの女の子たちには聞こえないように小声で言うと、相手はにっこりとした。

「追っかけなんて、適当にあしらっておけよ。お前、そういうところが不器用だね」

天宮の言葉は一理あるが、貴樹はそこまで割り切れない。

当然、割り切らなければやっていられないのは、わかっているのだけれど。

「だ、だって、せっかく俺のこと好きって言うってくれているのに、邪険にしちゃ可哀想だと思うし、プレゼントくれたらありがたいって言わないとだし」

「それはそれ、だって言うてんの。ファンは大事だけど、自分が体調悪い時にまで、いちいち相手にする必要はないだろ」

苦笑を残しつつも真顔で告げる天宮に、貴樹は目を瞬かせた。寝不足で調子が悪いことを、見抜かれていたらしい。それほど近くにいたわけでもないのに、鋭い。

「……あれ、わかった？」

「まあね。俺を誰だと思ってるの」

「貴樹、あんた、調子が悪いの？」

二人で顔を突き合わせてこそそそと喋っていたはずなのに、地獄耳の栗原は聞き咎めたらしい。

「……あ、いや、その……。ちょっと、寝不足なだけ」

「今日は余裕のないスケジュールだって、最初からわかっているでしょ！ 何のために、昨日は早く帰らせたと思っているのよ！ また、深夜アニメでも見て興奮してたんでしょ！」

「……だって、眠れなかったし……すみません……」

「いや、アニメ見て興奮じゃないんじゃないの？ 貴樹は恋のお悩み中、だからな。アニメの美少女に萌えるより、そっちで頭いっぱいなんだろう」

他人の恋路は笑い話にしかないらしく、天宮がげらげら笑いながら言い添える。

「順平ちゃん、ひどい……」

いつものメンバー、いつもの会話。そこに、不協和音が入ることはありえなかった。このメンバーでいることは何よりも楽しくて、素晴らしいことだと思っていた。これだけの人材とめぐり合えたことは、自分にとって一生に一度の幸運だったと思わずにはいられない。このメンバーが揃っていなかったとしたら、今のREAL M ODEは成立していないと思っているからだ。

だから、気づけなかった。気づけなかった。

追っかけの子たちと話していたその光景を、物陰から彩が見ていたこと。来ているはずもないと思っていた彩が、その場にいたこと。そして、そこから少しずつ歯車がずれて行くことを、貴樹はまだ知らずにいた。

11 (後書き)

実際、ここまでのツアーをやるアーティストにはボディガードがついてるんじゃないかと思いますが。
まあ、でも、それはそれで。

時間は、無情に過ぎていく。

約束した通り、北海道のお土産をたくさん買って帰ってきた貴樹は、彩から見てもひどく疲れた顔をしていた。お土産だけを渡しに来たのだと言って、家に上がることもなく貴樹は帰って行った。あまりに疲れていたようなので引き止められず、ましてや、あの空港での光景を問い詰められるような雰囲気でもなかった。

そして、そのまま、貴樹とは連絡が取りにくくなった。

携帯は圏外のことが多くなり、当然、自宅にはいないらしい。何度かけても、留守番電話が応対する。メールを送っても、三回に一回、返信があればいい方だ。たまに電話がつながって話せる時もあるけれど、それは貴樹からの一方的な都合でかかってくるもので、話せる時間も短く、当たり障りのないことを話すだけで精一杯だ。

空港で見かけた光景の理由を聞くこともできないまま、会えない日々は続く。あくまでも恋愛に対しては受け身でいた彩には、それがいわゆるやきもちであることに、最初は思い至れなかった。

貴樹と楽しそうに話していた女の子（貴樹の真意はともかく、彩にはそう見えた）は、どう鼻肩目に見ても高校生くらいにしか見えなかった。いや、若く見えるだけかもしれないし、だったら同僚という可能性はある。だとしても、貴樹とはどんな関係なのだろうか、一緒にいた同僚らしき女性の関係者なのか、それとも違うのだろうか、と、何度も考える。会えないままでの時間が長くて何も言うてくれないだけに、妙な妄想ばかりが膨らんでいく。

その想いは、どうしたって消えてくれない。

そんな自分に、苛々する。

それは、紛れもなく嫉妬で、そう思っている自分に愕然とした。そんなめんどくさそうな恋愛ごとは、したいと思ったことはなかった。恋愛関係だけに依存せずに、二人で一緒にいるのが自然体の

ような、そんな恋人が欲しいと思っていた。貴樹となら、何となくそれが叶いそうな気がしていたのに。

それなのに、どうして、こんな。

考えれば考えるほど、頭が混乱していく。そして、そんなふうに考えてしまう自分が、とても嫌になる。

逆に考えれば、こんなふうに混乱しているからこそ、貴樹と会わずに考えられる時間を得られたことはよかったのかもしれないと思う。それでも、会いたいと思った。会わずにいることが、辛いと思った。

そんな時に、貴樹から短いメールが来た。

『今、ものすごく忙しくて、これまで以上に連絡が取りにくくなるかも。ごめん』

そんな短いメールだけで済まされてしまったことに、正直、むっとした。ものすごく腹が立った。

納得は、できる。仕事が忙しいのは、わかる。彩にだって、そういう時期がある。子供ではないし、全てが自分の都合で動くわけではないことも知っている。だけど、だからってメールひとつで済ませてしまえる神経が信じられなかった。

それでも、貴樹に会いたいと思ってしまう自分がいて、いつの間にか彼の存在が大きくなり過ぎていることに気づく。帰ってきたら何故か人の部屋で寛いでいたりする図々しさとか、そういうことが当たり前になっていたことを、知る。だから。

どんなに無理をしても、会いに来て欲しいと、その瞬間に思ってしまった。貴樹が会いに来てくれないのなら、自分からでも会いに行きたい。だけど、彩は貴樹が今どこにいるのかも知らされていなかった。

彼のこと以外、今は考えたくないのに。

彩は、しばらくメールの画面を睨んでいた。

自分の気持ちを整理し、やがてひとつの結論を導き出す。どうにもならなくても、どうにかしたいと思ってしまった。一人の存在にここまで振り回されるのなんて、初めてだった。

携帯を置き、わざわざパソコンを開くと、貴樹の携帯宛てに一行だけのメールを送った。パソコンから送ったのは、自分が自宅にいることをアピールするためだ。

そのメールを見て、貴樹が会いに来てくれることを、少しだけ期待して。

『今から来て』

彩が長い時間をかけて考えた、たった一言だけのメールは、クリックひとつで送信された。

メールの着信音が鳴る。

だが、ホテルの部屋でシャワーを浴びていた貴樹には、その音は聞こえなかった。肌への刺激が強いくらいの熱いお湯を頭からかぶって、身体から疲労を追い出そうとする。けれど、蓄積されてしまったそれは、熱いシャワーを浴びたくらいでは簡単に回復してはくれない。

「……さすがに、疲れたかも」

降り注ぐお湯の中に立ち尽くしたままで、小さくつぶやく。酷使のし過ぎでかすれてしまった声は、傍から聞いていれば痛々しいと顔をしかめられてしまうだろう。

連日のライブで酷使される身体と、声。いつも以上に気を使い、きちんと管理をしているつもりでも、移動の続くツアー中は思いもよらない事態が起きる。体調を崩すことだって、ありえないことで

はない。

だが、それを会場に集まったファンに悟らせるようなライブをするのは、貴樹のプライドが許さなかった。それは、プロとしてしてはならないことだと思っていた。

それでも、辛い時はある。身体はくたくたに疲れていて、ライブが終わった後には自力で楽屋に歩いて行けないほど、疲労している。両脇をスタッフに支えられて、やっとのことで楽屋に辿り着く。それでも、アンコールには応えて出て行かなければならない。自分を待っている人が一人でもいる限りは、そこで歌うのが自分の選んだ道だから。

辛い。苦しい。

一言では言い表せないほどに、身体がだるい。気分が悪い。身体が自分のものではなくなったかのように重苦しくて、ほんの少しの動作さえも億劫に思えるのだ。

貴樹は最大にしていたシャワーを止め、傍らに手を伸ばして用意しておいたバスタオルを取った。大雑把に水滴を拭ってそのまま部屋に戻ると、机の上に置いてあった加湿器のスイッチを入れ、ベッドへと転がった。しばらくすると、蒸気が噴き出して来る静かな音が聞こえ始めた。

他のメンバーは、イベントの人たちと打ち上げと称して飲みに行った。一応、誘われはしたが、本調子ではない貴樹はそれを断り、ホテルの部屋で休むことにしたのだ。主役がいないのはどうかとも思ったが、ライブの後に外出できるような余力は、正直言ってどこにも残っていないかった。

ふと、携帯が気になった。

見てみると、彩からのメールが来ていた。珍しくパソコンからのアドレスで、不思議に思いながらもそれを開く。

そこにあったのは、たった一言だけのメール。

嬉しくて、それでいて、切ない。そのメールの希望通りには絶対にできないことを、貴樹自身が一番よくわかっていたからだ。

会いたい。その想いは、貴樹だって同じだ。同じことを彩が思ってくれていたことは嬉しい。けれど、今、会いに行くことなんてできるはずもない。

貴樹がいるのは、ツアー先のホテルなのだ。明日の朝には、また、飛行機で別の地方へ移動する。彩に会えるとすれば、次に東京に戻った時に無理やり時間をひねり出すしかない。

起き上がって時計とメールの受信時刻を確かめる。まだ、寝るには少し早い時間で、メールが来てからそれほど経っていない。起きているはずだと思い、番号を呼び出して発信を押す。

ほとんど待たされることもなく、彩が応答した。

「貴樹？」

「うん。……起きてた？」

「……うん、まだ、寝るにはちょっと早いしね。……そっち、は？」

「今、シャワーを浴びて出てきたところ。これから、寝るつもりだった。そしたら、彩からメールが来ていたから……」

「ねえ、これから来られない？」

急に言われた誘い文句に、言葉に詰まる。

「……ごめん」

わずかな沈黙の後にそう告げて、唇を噛む。

貴樹の答えに本格的に黙り込んでしまった彩は、一体、何を考えているのだろうか。顔の見えない電話での会話では、その真意を掴むことなどできるはずもない。

「そう。来られないの」

電話という手段においては長すぎる沈黙の末に、彩はそう聞き返してきた。

「うん。俺、今、自宅にいるわけじゃないし。えっと、福岡、だから」

「ふうん、そうなの」

電話の向こうから聞こえる、小さな溜め息。今すぐに、会いたかった。できることなら、今すぐに彼女を抱きしめられたら、と思う。

かつてないほどに不安にさせていることを、唐突に理解させられた。

考えてみれば、今まで、貴樹の方から一方的に押し付けることが多くて、彩から何かを受け取ることは少なかった。彩はいつも受け身に徹しているタイプだったし、そういう人なのだと思っていた。

けれど、決してそうではないのだということを、今の短い会話で思い知らされた気がしたのだ。

「じゃあ、いつなら会える？」

「来週、東京に帰るから。そしたら、羽田から彩の家に行くから。彩がいなくても、帰って来るまで待つてるし。えっと、俺だって好きで会いに行けないわけじゃないし、だから……」

わかってる。

こんな言葉は、単なる言い訳にしか聞こえない。貴樹が自分の職業をきちんと明かしていない以上、何を言っても嘘と誤魔化しを重ねるだけで、おかしい言い訳が増えて行くだけなのだから。

「貴樹は、いつもそうだね」

「え……っ」

「最初に会った時から、そうだよ。そうやって誤魔化して、自分に都合のいいことばかりを言う」

「……彩」

聞こえてくる声に、少しきつさが混じる。その声音にどきりとして、貴樹は手に持った携帯を握り締めた。

「仕事だって貴樹は言うけど、私には、その内容を少しも教えてくれない。貴樹が何をしているのか、私は何も知らない。別に、無理に聞こうとは思っていないし、言いたくないのならそれでいいと思っていた。でも、今の状況は明らかにおかしいよね。全部を言っただけでいいと言わない。言えないことがあるのは理解できる。でも、言えることだってあるでしょう？ 納期が近いとか、決算期だとか、誰かの失敗をフォローしなきゃならないとか！ 少しでもいいから話して欲しいと思うのは、私の我儘なの！？」

何も、言い返せなかった。

彩の言っていることは正しすぎて、自分の情けなさに気づいて、泣きたいくらいに自己嫌悪に襲われた。

「何だか、もう、疲れたちゃった。私は貴樹と付き合っているつもりでいたけど、貴樹は違うの？ 私だけが空回りしている？」

いつも気丈な彩の声が、少しだけ露を含んだものに変わる。その語尾にわずかに笑いが混ざったように聞こえたのは、どういう意味なのだろう。

その瞬間、心臓を掴み上げられたかのようなショックを覚え、貴樹は、これ以上は隠しておくことは無理なのだということを悟る。

彩がその方面に鈍く、何も知らないこと、追及してこないことに甘えていた。甘えきっていた。

普通に考えてみたら、こんな短期間に、無茶なスケジュールで各地を移動するようにして留守にするのは、異常な事態なのだろう。いくら仕事だと言い訳してみたところで、深く突っ込まれた時に誤魔化すしかできないのでは、そこに不信感が生まれても文句は言えない。

そうして、すれ違って行く。

そのつもりはないのに、彩を裏切っているように思わせてしまう。おそらく、この辺りが限界なのだろう。解決するためには、全てを告白してしまえばいいのだ。だが、今更、どうやって告白すればいいのか、見当もつかなかった。

それでも、今を逃せば、永遠に彩を失ってしまうかもしれない。

それだけは、絶対に嫌だった。

「彩、その、俺、仕事ってのは……」

言いかけて、言いよどむ。どう説明をすれば、嘘っぽく聞こえずに真実を告げられるのだろう。彩の追及に困って、言い逃れるために嘘をついていると思われたら。

真実を言おうとすればするほど、滑稽なことになかならない気がして。

「言いたくないのなら、別にいい。でも、少し考えさせて」

「そうじゃない！ 俺は……っ」

声がかすれて、喉に張り付く。さっきから少し違和感のあった声が引っかかって、貴樹はむせて咳き込んだ。思い出したように襲ってきた全身の疲労感に、力が抜ける。そのまま、ベッドに倒れ込んだ。

「……貴樹？」

「ごめん、ちょっと、むせた……」

ひとしきり咳き込んだ貴樹を心配するように、彩の声音が変わる。そうして心配してくれる存在を、失いたくない。そう、痛烈に願った。

なのに、勇気がない。

真実を告げて、彩がいなくなってしまったら、生きていけない。以前に付き合っていた彼女のように、REAL MODEの貴樹なんて要らないと言われたら、今度こそ立ち直れない。もう一度追いかけられるほど、度胸はなかった。

「俺、だから……その」

「わかった。もういい」

彩は低い声でそう言って、電話を切った。

慌てて電話をかけ直したけれど、電源を切られてしまったらしく、つながらなかった。何度リダイヤルをしても、虚しい音声ガイドが流れるだけだ。

辛いのも、苦しいのも、自分だけじゃない。それはわかっている。だけど、どうしたらいいのかわからない。この疲労も、何もかも、どうにもならない。

投げ出すように携帯をベッドの上に放り出して、枕を殴りつけた。
「俺だって会いたいってば……！」

他に聞く人もいないのに叫ぶ言葉が、彩に届くはずもない。
帰りたい、と思った。

このまま、何もかもを放り出して空港に行って、飛行機に飛び乗

って東京に帰ってしまいたい。今ならすぐに着替えて部屋を出れば、ギリギリで最終便に間に合う。そして、彩の家に行って、謝って、全てを話せばいい。

会いに行きさえすれば解決できるような、そんな気がして。

それでも、放り出すことができないことは理解していた。そこま
で、自分に無責任になれなかった。様々な人に支えられている現実
を、嫌と言うほどに知っていたからだ。

まずは、目の前のことをこなそう。この身体の不調を何とかして、
ライブを成功させるしかない。自分でも納得できる仕上がりでライ
ブを終えて東京に帰ったら、ゆっくりと彩に会いに行く。その時に、
今まで言えなかった全てを話す。そうすればいい。

真実を知れば、彩だって許してくれるかもしれない。わかってく
れるはずだ。

そんな希望を持つのは、間違いではないと思ったかった。

翌週、九州から沖縄を回って東京へと戻った貴樹は、羽田空港で天宮やマネージャーたちと別れ、その足で直接彩の自宅へと向かうと思っていた。事務所に寄る用事もないし、自分の自宅に行く時間も惜しかった。一秒でも早く、彩に会いたかったからだ。

それを言っていると、栗原は渋い顔をした。

「え、ダメ……？」

「あのねえ、貴樹。あんた、自分の状況がわかってるの？ 向こうでだって、倒れて点滴打ってもらったんじゃないの！ 今日引きずってでも病院に連れて行くからね！」

栗原に怒鳴られ、貴樹はしゅんとうなだれる。

「で、でも、大丈夫だよ？ 点滴打ってもらって楽になったし」

傍から見てもかなり青白い顔をしているくせに、そんなことを言ってみても説得力が乏しい。と言うよりも、皆無だ。その子供じみた言い分に、栗原は呆れ果てたように溜め息をついた。

「……あのね、大丈夫じゃないから言っているんだよ。あんたはバカだから言わなきゃわからないかもしれないけど、かなり辛いんでしょう？ さっき、那覇空港で追っかけを怒鳴りつけそうになってたのは知ってるのよ。あれだって、自分がしんどいからでしょう。自分に余裕がないから、些細なことで苛々するのよ。あんたは追っかけに当たり散らすような真似は普段しないし、いつもだったらあの程度で怒鳴ったりしないのは自分でわかるでしょ」

「でも、俺、今日は用事が」

「恋人？ そんなことは後にしなさい」

栗原はぴしゃりと言い放ち、くると踵を返した。

そして、待ってましたとばかりにスタンバイしていた天宮に合図をする。

「天宮、そのバカを取り押さえておいてくれる？ 私、駐車場か

ら車を回してくるから」

「はい、了解」

反射的に返事をして、天宮は素早い動きで貴樹の後ろに回りこみ、羽交い絞めにするような形で行動を制限する。いくら運動神経がいいとは言え、あまりの速さに貴樹は逃げる隙もなかった。

「何すんだ!」

「何って、病院行くんですよ」

「裏切り者!」

「人聞きが悪いなあ。でも、栗ちゃんの意見には俺も賛成だよ。お前、自分でもわかってるんだろ? 思っていたよりも沖縄が暑かったし、昨日のライブだって、見ていてひやひやしたのは俺も同じだ。お前、自分で鏡見てみろよ。尋常じゃないから。とりあえず、栗ちゃんが言う通り、まずは病院に行った方がいい。恋人に会いに行くのは、その後。別に、会いに行ったらって俺は怒りゃしないよ。むしろ、ここで逃亡したらぶっ殺す」

「で、でも」

理由は言えない。

それでも、貴樹は焦っていた。早く彩に会わなければ、何もかもが終わってしまうような、そんな気がしていたからだった。

「こんなことを言いたいわけじゃないが、金が動いているんだよ。それに、お前のことを待っている人は、たくさんいる。お前は東城貴樹っていう個人かもしれないけど、REAL MODEの顔でもある。それは、絶対に忘れちゃならないお前の大事な仕事だろう」

「……ごめんなさい」

いつもは茶化した物言いが多い天宮が、いつになく厳しい顔で真剣にそう告げる。事前に栗原から何か言われたのかもしれないとは思ったけれど、栗原に言われるよりも素直に聞ける気がするのは、栗原との距離感よりも天宮の方が近いからだろう。それに、貴樹は天宮のことを尊敬している。いろいろと問題大有りの人だが、その才能だけは本物だと思うからだ。

「わかればいいの、わかれば。どうせ、恋人だって昼間から家にいるとは限らないんだろ？」

それは、確かに天宮の言うとおりだった。

彩には彩の生活があつて、それは、貴樹と同じものではない。今日は平日だし、今から訪ねて行つたとしても、彩は仕事に行つていて留守である可能性は高かつた。それは、最初からわかつていた。

ただ、一秒でも早く彩に会いたかつた。

そのためには、彩の部屋で彼女の帰りを待っていることが、一番確実な手段だから。

それに、少し考えたかつた。彩が帰ってくるまでに、REAL MODEの東城貴樹ではなく、ただの東城貴樹に戻つて、一人で考えを纏めたかつたのだ。

「……わかつた。病院へは行くよ。だから、離して。逃げないから」残るライブは、わずか八本。だからこそ、ここで倒れるわけにはいかない。自分の我儘が、大勢の人に迷惑をかけることになるのは、わかりきっていた。このツアーの成功のために走り回っている大勢のスタッフや、楽しみに待っていてくれるのだろうファン。その全ての期待を裏切るには、『REAL MODEの東城貴樹』が持つ重みは大きすぎた。

だが、それは、公の場に立つ自分を考えている貴樹の理屈だ。単なる東城貴樹の想いは、そんな理屈なんかどうでもいいことだった。東京に戻つて来られた以上、彩のことしか考えなくなかつた。

彼女に、全てを話さなければならぬ。そうしないと、彩はいなくなってしまうような気がした。そんな焦りにも似た想いに、頭がおかしくなりそうで。

どこから、何から話せば、わかりやすいのだろう。

ぐるぐると、同じことばかりが頭の中を駆け回る。

たぶん、最初に彩と出会つた、あの時の理由からだ。彩と会えたそもその発端は、あそこでミーハーなファンに見つかつて追い回されたこと。それが、全てのきっかけだったのだから。

最初は、自分のことを知らない存在が物珍しかった。それはすぐに興味に変わって、そこから好意へと発展した。ついでに神とも崇めるミサカダイスケの幼馴染だと知って、テンションも上がった。REAL MODEの東城貴樹の顔を知らない彩がくれる優しさは、そこに裏表がないことを素直に信じられて、それが嬉しかった。

だから、甘えてしまったのだ。それではいけないと頭ではわかっていたのに、言い出す勇気が足りずにそのままにしてしまった。

栗原に引きずられるように病院に行って、それから、彩の自宅へ向かう。薬のせいで頭の奥がぼんやりしているように思ったけれど、そんなことはかまっていられなかった。

案の定、彩は留守だった。

もらっていた合鍵で部屋に入ると、几帳面な彩らしくきちんと整理整頓された空間がそこにある。オタクの例に漏れず大量にもの溢れた自分の部屋とは大違いだ。その中に貴樹という異分子が入り込んでいる証がそこかしこにあって、その事実嬉しくなった。

貴樹は持っていた荷物を置いて、部屋を見回す。

ふと見れば、部屋に置かれた小さなテーブルには、数枚の便箋が置かれていた。それは、書きかけの手紙のように見える。

悪いと思いつつも覗き込むと、書き出しは『貴樹へ』となっていて、その後は真っ白だった。

何を書こうとしていたのだろう。もしかして、別れ話だろうか。

自分でした想像に暗い気持ちになりながら、フローリングの床に腰を下ろす。彩が帰って来るまでに時間はありそうだし、その間の空白を埋めようと何気なくテレビをつける。考えるためには雑音かもしれないが、無音の空間も耐えられそうもなかったからだだった。

しばらくぼんやりと見るとはなしに画面を見ていると、急に自分の顔がアップで映った。しばらく前から流れている、ジャンプのCMだった。

思わず慌ててテレビを消してから、貴樹は溜め息をついた。別に、テレビに映る自分を見て今更はしゃいだり驚いたりはないが、好

んで見ていたいいものでもない。

「……寝ようかなあ」

葉のせいなのか、妙に眠い。身体のだるさよりも、瞼が落ちてきそうなほどの強烈な眠気の方が辛い。この状況で睡魔に勝てと言うのは、少々無理な相談だろう。

眠ってしまったては考えも纏まらない、と思うのに、抗えそうもなかった。

「寝ちゃおう。うん、そうしよう」

貴樹は一人つぶやくと、テレビを消して勝手にベッドにもぐり込む。しばらくすると、規則正しい寝息が聞こえてきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9438y/>

Over Line～君と出会うために

2012年1月10日20時58分発行